

東國旅行談
全

二百二

ル 3
3415



門 3
號 3415
卷



序

代り住たり民とて實申そり
賑ふありごり時り生る國と見え
本意なり望思ふ友ども連たら
陸奥の松島くちちらどし道すぐら
名所舊跡産物まで柳み同人か
身く旅行り袖ゆり合と人の話と
書少く免西用一歩と進め程なく

早稲田 大學 図書館
昭和 30.12.16 受
藏 書

右御の武藏不帰て朝夕をれと見えむひり
 河原乃た大長千賀の浦を都母換なまら
 かくやと獨たのしみきると書林何げと終て
 梓みせんと子たわらば旅泊とて聞し話まてと
 書と人争是るや実か信誓日向の物ごりや
 讀もふんくみ恥しおがう書くわえ畢

天明なまのゆ

丁未乃春

壽鶴書

東國旅行記卷之一

○ 目録

- 鶴乃臺
- 標茅が原
- 黒き清水
- 雁島
- 走大黒
- 慈悲心鳥
- 巫女石
- 氏家の肴
- 國界の石
- 荏乃宮
- 啼ぬ鶴
- 石佛の観音
- 名物の牛房
- 裏見が滝
- 秀降の滝
- 陸乃泉
- 船玉の社
- 喜連川の橋

丁未乃春

- 物見乃臺
- 殺生石
- 境乃櫻
- 十八坂
- 腰掛臺
- 杉田の茶師堂

右二十九談

- 鍋掛川
- 遊行柳
- 八尋の控
- 鏡足公の宮
- 浅香沼

卷之一目録終

東國旅行談卷之一

撰者壽鶴齋書

鵠乃臺

武州栗橋より西の方に大山あり鵠の臺といふは往古日本武州の
 東夷征伐の時此乃栗橋の川にわたりてある大河を流るる
 便なけり尊志とて思慮とぬぐじ結ふ所也鵠乃雄とて
 一羽をばりて羽たきある此河乃浅瀬とあゆ者
 奉きりより勅諭ありて此西の山と鵠乃あふをばりて橋をせ
 空宮といふ今この代までもけ山と名はまを鵠の臺といふと
 ち赤土乃川も此廣き事九里八町ありしゆ里人の川や
 かく言説て栗橋といふ事

雀乃宮

奥州街道下野國雀乃宮宿といふあり雀大明神此宮あり
 ひし此所也何果とて百姓あり相撲と取れたのみとすか
 け人常也餅まんじうの類と丸呑みする衆と侍をすん人
 かり時に女房密夫と云らん夢と害せんとおん密夫
 謀く饅頭の中へ針と入て或時それを夢とに与ふ夫曰はる
 侍連と見せんと共まんじうと丸呑みする其明る日より
 眩中何ぞや痛と云らんおきとて折針縫うまゝに裏の
 庭と口をば雀一羽きこり苦氣に茶と枕と云ふ侍と云ふ
 雀一羽きこり何や細き茶と云ふ人々茶の雀の口へあてぐん
 主人の雀やうくおと喰けり怒く云んげお花まる雀乃

尻より白く光あつても小き物と云ふたりいふや虫や
 ぞ思ふと夢と云ふに枕とあげて徐々庭中より彼糞と
 云ふと針の尖なり友の雀が云ふ茶と云ふの蓮といふ茶と
 不思議も亭と云ふら思ふ夢と云ふべ我中へ入る饅頭
 乃中へ針の有し毛と云ふと云ふ何氣なく女房と云ふ
 口あぢかひも蓮と食ふと云ふや終きれば女房おれと云ふ
 夫中へ男と云ふは涙もかかれば有雀のおとと云ふ
 たり彼針蓮にまじらるとりきりね病氣は氣して女房
 たくみ服と服と云ふと去るを我命と云ふ人彼雀乃
 御蔭なりとて宮宿と勸請を今にけ所中より雀大明神
 也崇敬しする

標茶ヶ原

下野國宇都宮乃宿の北に古洪野の原なりや此
 所乃古歌母を頼めたりが原の原にそと我世の
 中にあり人のぎりのいんまに讀給ふに飲世音の御
 詠哥なりや中傳ふ今に宇都宮町とあり人屋の
 並く懸冒乃地より所鎮守の明神の御社あり其茶
 原乃古跡とすに強て堂あり地蔵菩薩と安置し
 奉り無強あらたかりる像なり地蔵の觀世音乃化身
 ありて火防の御佛なり町家のお母まのふなりを
 標茶ヶ原の名に殘て寔ぞ古跡なりやいん傳ふ
 不啼鳴

下野國足利乃鶴の夢なり昔は國の領主うづつと籠を
 浅くばち籠の金銀をとりてめ朝夕なく音と由賞羨
 ありやるとも或夜乃御夢お新ありてちやうやう乃金
 銀と延たる籠お飼ふより山野お極おを嬉しけれと
 領主おとまの汝が啼ゆめおを籠をとす終啼はれど
 誰う籠をちと益かき答ふよとて御夢の原免おきり
 其羽よりと鶴一勢も不啼こるや今にひいひ國の御令
 主乃御屋鋪御の家の御家中を彼うづつお承ひひり
 かり今に何ぞお箱の赤い有ましとて密お御國より鶴
 と取よを結りが今も一勢も不啼しめて他の御屋敷
 まるに終はくは其御屋敷にては鶴よく啼とる

黒き清水

下野国足利郡小谷町ありし一釜殿長者といふ人あり其
子孫わづらひに残てけいふ乃半町をり上中住むるが或時ぬそ人
這入たれども家貧しけきば何れ盗取るる物もいりしゆ
寔母大釜のありしと持行きり夜も明く尋むる是れを
東みおんやりて農業にゆく道乃傍なる谷間中件の大釜と
捨ゆきたりまより人とつらふ大釜と持ゆりしが其釜乃底
乃ありし跡より今も黒き清水と記する事あるをいざぎ也
釜殿といふ一不思議あり釜をうんとや傳ふ

石佛乃觀世音

同國中坂東十七番の北所出流の千手院あり奉りて大
二丈むるれ千手觀音乃の像なり此窟の後中一丈半乃
楷榑と之殿にけりて巖石と二丈ありて登れは大方之窟あり
是と大師の巖屋といふは法大師自御彫刻の六百餘
諸佛菩薩幡天蓋櫻絡の類を彫付しよ糸詣の人
は洞穴に入りて蠟燭と然しておれと祥と

雁島

下野乃國並下総乃豊田郡石下村の街道より昭なりお乃
石下村東弘寺の東流二十口紫乃事跡ありて高柳山信順
院と號と寺領十石あり當寺の用山善性房とすの示
毛桓武天皇十八代乃末孫豊田の口即晴款あり親藤
上人菴村大宮ふお在りもり紅圃は歸依してより

内子子とわう新發一六の道場をゆくけ村乃長源氏の
 少く者あり上人の法と蔑して生くる雁と捕ておとを
 親密上人お賜り上人をろく受もろく大沼お放つ
 雁翼といさめく飛来と得上人筆を採く雁の翼お
 流とい字と書て放るべ雁ぬまた落る不思議あり
 忽然やして其所お小流とけ雁をに息む諸人は是を
 雁流といふ平日の流は毎年八月七日三月七日おけは
 あつれ今雁をお群がり集りて息む来影一時
 正徳二年七月廿六日善性房おに寂しとふとる

名物牛房

下野國宇都宮より北に二里あり宿乃つり

寺町むくの坂道あり其の中茶屋あり此寺に牛房
 汁を賣あらう其甘美ゆてあかしく向れ牛房なりまこ同
 國業といふ所の牛房の長を尺ゆてはるまこすすて
 菓かしくゆく閑宿といふ所乃牛房の長三尺八寸あり
 本末ゆてゆをか常れ牛房より右に當國といふて名物
 ゆて味りゆ至るよら

大黒天

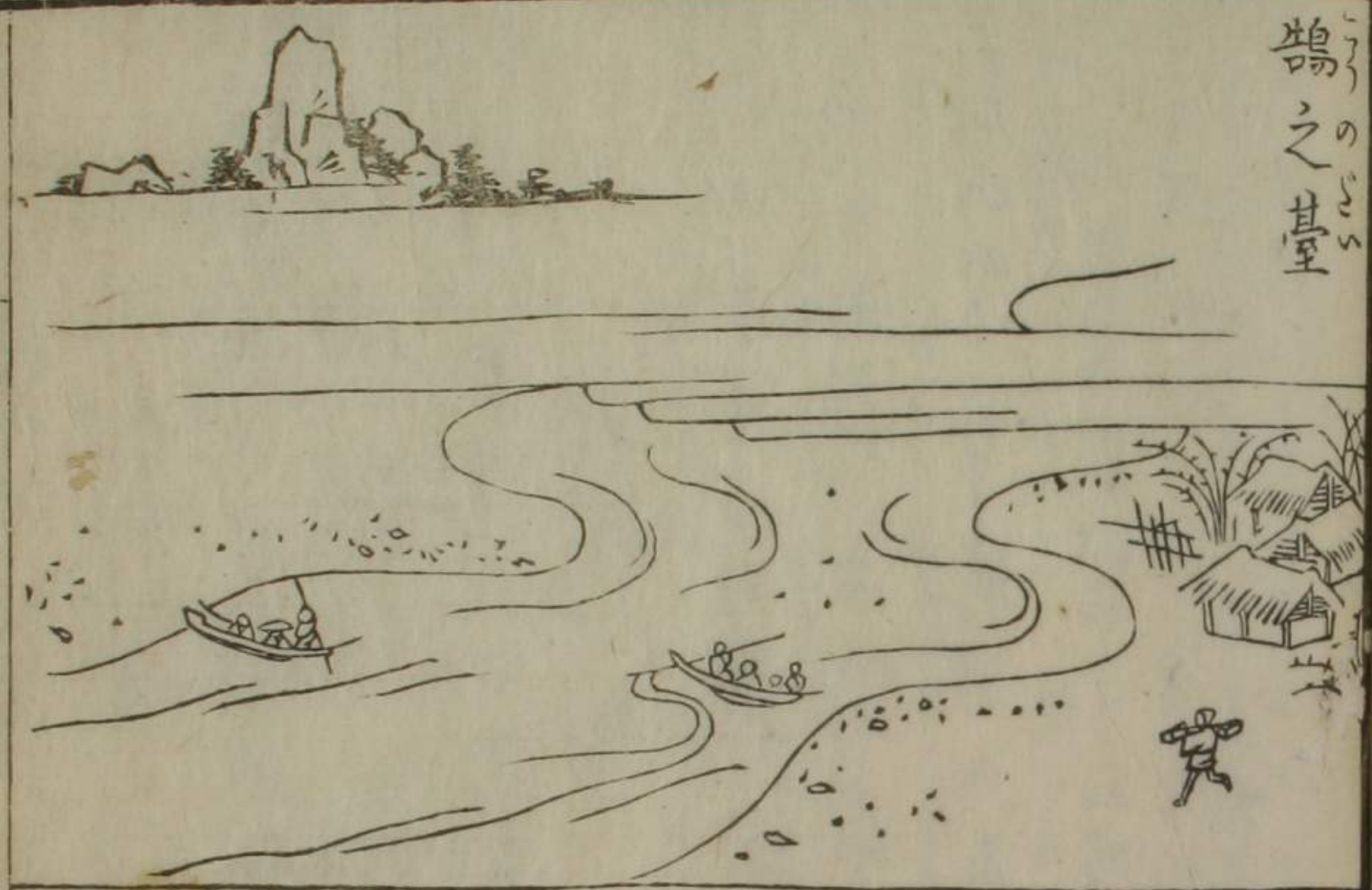
下野國日光山中禪寺の不動尊相殿お大黒天あり諸願を
 祈るゆに靈驗あらゆゆて忽か人ふにゆり早きとらと
 ゆく大黒と申奉る不初るへ土をけうとゆり給ふ大黒天の
 水とつとゆり給ふ水と守り水いふと養ふの理と以て分

同一醉の容とる當山の因基聖道上人子居る之木
以て千手觀音と彫刻しむ本寺なりとて結ぶ其彫刻亦
本乃唐中禪寺の池へ飛入忽死して此二醉と成るふと
いりて後祥奉ふ本唐と東よりなるも誠かゆぎの由來

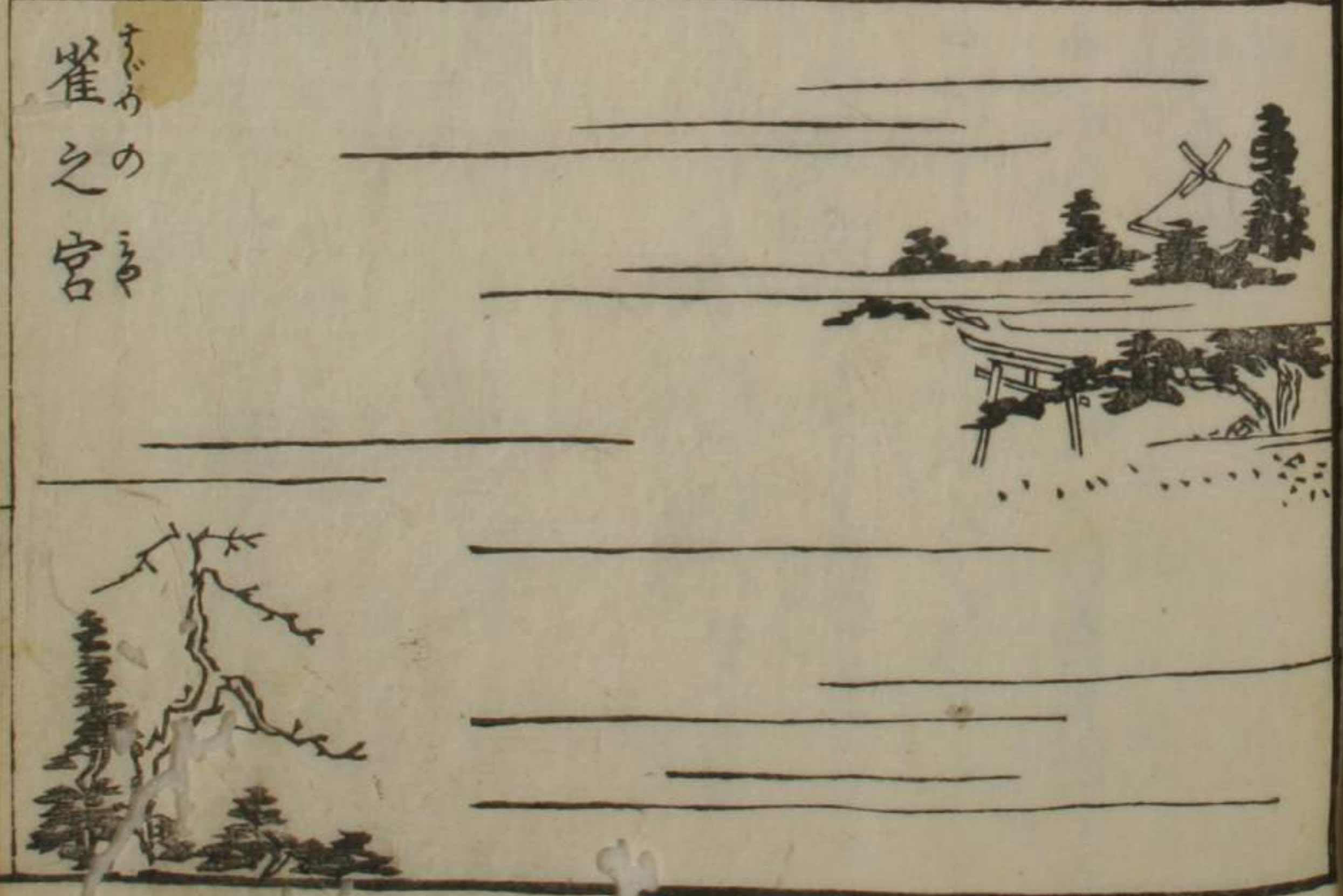
裏見が滝

同所み滝の敷心十八あり中ゆえけ滝の山廻り大石より出て
巖窟ありうさ一丈餘ゆると二丈ありと云途川みたとて
姥乃石像あり是より滝の本へ行ば滝乃裏と云ふ葉
らと二丈あり見あがれば不動明王の石像ありはと
裏より入る滝はれは其名とあるは其のなり又日光細工とて
久々の袋物と探めて行ふまるとかたご影

鶴之臺



雀之宮



氏家乃者

同國宇都宮より氏家宿まで百里半の戸より二十三里と
 つく奥道中仙臺羽州酒田まで海魚のなりよくとむ子
 川魚あるとい陸岸をさう也時おひ氏家宿の海魚は山あり
 別て三日月乃あるまでハ朝ゆめ其介つらく夥しくあるこ
 ゆきお思ひ身は常陸水戸よりうそてあつてつよそ
 道は何程ありやと問はれ十里たれ有とよはるとに有
 路と御代おけれまきけ山路を海魚と合する事と感

和玉乃宮

川く氏家宿より水戸まで九里余りに壽昌山祇園禪寺
 乃境内大日本國第一社天妃聖母和玉神とすなり衆

海上風水の難と救ふ御神の御社なり當寺乃岡山心越
 禪師ハ大明國より日本へさう給ふとれ海上安穩守護乃お
 和才ハ安置志ふなりそ容なりとう心越禪師ハ唐土漢乃
 壽亭候關羽の苗裔なりたてて關羽傳来の金印をいみ
 玄徳五丸乃鏡亦乃靈筵ふか御寺乃什物なりとや

國境の御寺

下野國結城弘經寺ハ浄土宗の檀林と寺領五拾石あり
 本堂ハ常陸乃國お建られ下総の國お方丈と志しつら
 臺所おまどい下野の國なり新三箇國おつら事ハを
 めのらき事おれいふに載るものなり

喜連川の橋

同右連川の驛中川の入口中川あり水くわく川幅見まじし
三十余間とる白橋あり鐵乃大きなり鉄鎖と付くた石へ
繫あり橋杭をを幸ひして鉦木のおとく洪水つげまば
橋亦大綱を付く往來自由なりといふ実中橋うき橋あり
まじし川中點あり郵舟して賣志の所の名物なり竹火籠
と高し旅人おれと求て家去るかす

物見乃松

下野國作山の驛より大田原まで三里が間の險き山道なり中乃
作山の宿乃入口中吉次若岡吉六うらの石塔あり又宿中乃
すう山乃へつる西の方街道ごとく熊坂長籠が物見の雲
やぐ古き松乃大木ありい雲れ枝をへくやむい茂きなり
中仙道濃原赤坂岳并大なりれ宿にも熊坂物見の松あり
い川まじり籠とまじりや祥あり

鍋ヶ川

同國大田原より湯ヶ川の驛へき里中宿の入口中川あり此
右宿乃谷より其間の街道なりい川より上に殺生石あり中
一日亦二度三度げ水乃るぐれ至てくわし其時へ水亦毒氣
ありやいん佛ふ又大田原踏ぐりの間中陸原の温泉西北方に
見ゆり白き雲り煙かしくさう山の嶺と流る物あり也

殺生石

同國那須野ありうとみ間をる坂と踏く岡ありい川
石亦方とゆるい包あり死に入らるた虫と取く石のうり

其故いふ事しつと事とあはばまは在りこより鶏の卵と多く知を
江戸へ送り荷中須賀門出とあるはふか卯やり影つき事なり

腰かけ巻

日國郡山の驛より福原日和田うゑ奈本宮の驛まで三里の間
あづきの街道なり右のうゑ奈のうゑ奈本宮のねあり枝系玄て
はなはら山乃おとし足天智天皇のちうけ巻とつひ傳ふまは山
と淡香山とつよ上右天智帝の御時お奈女とやせし官女はけ
里の春やると名幼雅とれより内裏お宮仕しとありしが年たけて
父母とあはくおひ泰を帝より御服と賜りお御みとゆき
おなく父母もやしく成るは奈女をとおどきかくや思ひん
我家おんじお井お身と沈むおれもやしく成おきり帝の

斯とえあはしるは奈女が事とゆき思ひおくの名不御
遊覽と仰出され奈女お古御の慈あらんを奈女が身乃果を
聞し百てあはしけねの本に御傳しきり少人なり
かけねとつひ傳ふとや又奈女が古井と御覽ありて御製
淡香山かけえんおぬふの井乃あさくを人をあはしお
や遊むしきりとも淡香山淡香沼山乃井花の門に此不
乃名所なりとお教ぬ
時まらるるあはれのおまは淡香の山いりうらふおきり
淡奥乃淡香乃沼乃花の門に御傳ふ人おあはしやうら
又淡本の奈女の南都猿沢の池お身と投しや作らうと
ましこ別乃奈女かりをきり詳かふべ

方行... 卷...

浅香沼

日所かりけ沼のむく大蛇すそ人とり毎年九月十八日
人身御供とて十以下乃女子とありて棄てて有けり
あり時観世音乃妙智力によりて大蛇佛果と得て天上
其後人身御供やきりて中侍ふとて日所日和田乃宿
寺あり當寺の本堂に正觀世音菩薩とて松浦佐左衛門
存ると安置せし門前に石碑あり松浦佐左衛門大伴の
狭子彦が妻ありまの遺唐使の役と勤り唐土へける佐左衛
つれと惜み海をこみ出くま狭子彦があつる船の雲霞と氣の
えゆりまをえおろろとぬとぬと終ぬ泣死す其す
ふと成て今も肥前國松浦の瀬乃瀬ふありとれ九門乃西

人身御供



山之井



ちの東の陸奥いふ所なるに依を娘の守存ると穉多と安
 置しきりやと不審りきればけ所の老人乃てふかしく白ひし法
 香の所か人身御供と候し以とや所の長者が娘その當番に
 わらしうげぬ親おれと強き餘多の家来おし合て娘が身か
 のり御供かたりものわらへ財宝へ何れも成も成らざるを
 連多とと大勢の家来とより多あて國と求あてとて大
 誰い子乃命と奪せしといふ親もかりき絶たすみ茶なる娘
 と連てゆりき家来あり娘や童太さよとてゆさかひ身
 けり親類もけり物おれ父母ぬく觀世音と信り常々何とぞしと
 觀音様と一休彫刻し奉たき願成成就せんとて桐果はれ親の
 望とけりたまつと童が命けりけりけりといふ願おはるを佛師と

松を觀世音と刻しむ晴かきや人身御供の夜か至きしはこい
 其支度とて檀かあがり幼おらとわらる觀音様と一仏不礼か
 談誦して時を逢とわらねばかか大蛇身にて娘と若人とん
 其とれさよの目とぬさだ名号と聞かか竹御短と大蛇の頭お
 おきけと大蛇ならはら併果と得と其後人身御供といふ事
 かしおれいこよといふ女の徳ありと賞どりけ寺に觀世音と知し
 飲しめて松浦およと松浦佐世娘と混雜せしをわらしやんら
 松田乃茶師
 同園茶宮宿より二本松宿中へ二里半余あり其おひご母
 松田高といふあり街道より去地より石不して茶宮宿を
 見おらとかりけ宿乃入口か小うにふあり石だん乃坂と覚る

ねしを町をぐる茶所也来を安置し奉ふ堂あり造堂
 甚然撰かり靈漢ありたありて諸般成就せむといふ事か
 づがゆい遠近御より老若男女貴賤くんと由糸指ぬ
 後り同かく春秋の彼岸あり野々き市をかみ其くんとやと
 けし乃俚談喫ぬ

所がらぬすぎこの茶所々かの茶宮と月のあさみ
 ろやうに視んむがはありけしかの茶宮といふを理りかれ志の
 宿乃家作の風流の筆にありがじ家々に苗女といふ遊女母似
 たる者ありとすての奉奇藤あり

東國旅行談卷之終

東國旅行談卷之二

○ 目錄

- 初秋之氷
- 文字栲石
- 篔簹竹
- 盤大山之卷
- 鏡沼
- 判官腰魚巻
- 春之河原
- 三月月石
- 出水之砾石
- 細布
- 甲冑堂
- 茶凌
- 毒石
- 素折之巻
- 杉木堂
- 山伏岩
- 銀山之茶屋
- 上之山之温泉

旅行談卷之二

カネノニノ巻目

- 山形之花市 ヤマがたのなはり
- 水晶山 クリスタル
- 櫻川 サクラガハ
- 柏木原山 カハキハラ

- 浮島 ウキシマ
- 稚木之森 ワキ木の森
- 仙人堂 セニョウ
- 十八守之杉 ジッパシ

右二十六談

卷之二月録終

東國旅行談卷之二

撰者壽鶴齋書

初秋の氷

六月朔日丹波の國桑田郡氷室山おしりより氷室朔神
 伊はせて氷のいさだよきををり給ふとや毎年六月朔日
 禁裏へ氷を獻ト奉ト古例なりと凡出記亦云く
 今も將軍家へ氷の國より六月朔日獻上りたる
 奥州二本松の城下其不在町を七月朔日に氷と高
 氷ありく其すごとく市の人とえゆ小はたは毫入て西山の
 氷くといふ予ふかしの後とせし積云々わんきれどら
 され鋸を壹寸五分四方長五寸とより挽切られきりと持

旅行記

てんぐに子たれ冷くやしてはるる寒中れん地ぞ志る氷と
葉を綴り提て朽きらんを里中やどの所か茶屋ありき
爰て氷とけたましーが誠く堅き氷とぞ布ける六月の
朔日也を夜寒風らん其寒の同じて別ぬ

細布

奥州津軽青森より心里中武蔵のよ安佐虫宿と子不
に錦木塚といふあり此邊とて布を織き絹はじと
と織て高小近世のあゝうけき島織などわういけきと
巾み六寸長八寸とあり是細布なり右秋也

錦木は五ふぐちを朽かきりその細布はわおじとい

安佐虫宿より二里小湊宿あり今日れ里ありけけの里の

夫婦の縁を定むるに娘あり家の門口へ掛り男は錦木を
持ゆき置くと帰るとあり其本を多に色採おしくれん
印ありて誰が錦木は百夜きとて入て百本あり誰と
あら永くも袋衣かよんだればちを錦木の粒多しは
誰ちを思ふぬ〜は男れ妻にちるもとて縁と定たるを
中をを頼がし錦木の粒かさかりては女のありぬもあり
まらあや左秋也

袋衣も胸わびる我患の焚火もあゝぬきあ

細布くわみ讀しやるや実也右き名所とて有る

文字摺石

奥州福島驛より山口宿までいあま川あり節黒

川とつみ此川舟はききたる山の上面幅七尺舟長一丈二尺
 ぶりりたる石ありけるを信史草といふまるといふ石面を
 みづけの鏡のおとく我がげと摸れり鏡石と名を分りて云
 又の絹あらしの紙をける舟あそ被志れあまるといふ摸れり
 石乃摸様うけりてあそ舟礼際とちりて石をちりてあそ
 右歌舟へみられりのおのぶもいづり誰ゆへにこれとめ舟
 ちりたりかくにけきり百人一首舟河原の左大舟やちりて漆乃
 融乃大舟の四季ちりてあそ舟のちりてあそ舟のちりてあそ舟
 舟のちりてあそ舟のちりてあそ舟のちりてあそ舟のちりてあそ舟
 山よりちりてあそ舟のちりてあそ舟のちりてあそ舟のちりてあそ舟
 残て今石と摸れりかすといふとけ福島町の町にて信史漆

とつみ紗綾縮緬絹と織てこれ漆はし當所乃名産也今
 京都でも賣にやるともあそ舟のちりてあそ舟のちりてあそ舟
 ちりてあそ舟のちりてあそ舟のちりてあそ舟のちりてあそ舟

甲曹堂

奥州佐保川とつみ所の九郎判官義経公乃忠臣佐友
 次信忠信が在所なりとや友人討死せし後すをも舟
 け所舟住居と二人が妻もともちりてあそ舟のちりてあそ舟
 所とつみわるとつみ風聞ときて待りよけの為に州堂を補理
 きりてつみ幸古書舟とつみ今け里舟舟あり甲曹堂と
 つみ次信忠信二人の妻甲曹と着る本像あり其石跡
 少やとつみ乃の傳記にまじりてあそ舟のちりてあそ舟

箴竿竹

日國信太郡福島乃庄下乃出口街道より左のこま
又ゆる業々やうなる森あり其こまの竹あり予
まう業日も西のこまの里をわたりぬる竹あり
け寺の何宗といふ事も聞かぬ寺の名をも身よりし
の竹の竹箴あり何本いへてせてもけ箴の竹の節間
尺を定て日とやうに生たうて長短かへ減り稀なる竹
なりけ所ぬれと佐友次信忠信兄弟が箴竹といふ

紫漆

日國福島より程らくに御舟川赤村といふ所のひらたの
久しゆの美しく漆物よめりて妙鏡備細羽二重赤の

模様その物 竿にけられぬ風も靡きらん
紫乃久あさ日輝と映してはかぎり福島の世界を足
あらんかと思ふて何となく花やうかと因て川赤紫と称美と
盤大山の炎

該奥國何郡と聞しが名なくや筆記の書中なる所ハ
猪苗代といふ所ハ湖水あり景久かたておきり東
大いあり盤大山と名づく嶮なる高峯乃嶺より
炎火たらぬやうな列々して其煙雲やうく天を
焦も勢なり倍り潤あり水波灘くや一時くたみ
はくそら風と起し遠をくらふ氣久身常れ業にわ
同く方俗とて地獄といふ

毒石

同所より母印を建て人を寄ぬ石ありこれ毒石と
いふ鳥類畜類いづれも母印を建て人を寄ぬ石ありこれ毒石と
殺生石乃種類なりざし一街道ありざれはあり人まれ
なり全醉ふ乃山の異霊乃深山なり

鏡沼

同國信夫郡福島より瀨之上乃驛まで二里余木の岡
あり村を鏡ぬま村といふ當所いづれも母印を建て人を寄ぬ石ありこれ毒石と
今も沼乃名を残と夫母はき所のり傳人に不思議なり
兼あり中いづれの比とや大地震ありては沼乃水と吹
出大洪水ありて四方へながれ水つたれ自然と堅地あり

大地震ありて地裂裂そのち舟より丸を尺五寸むりなり
鏡とゆふと物と重とんれは天照皇太神宮信夫郡のみ
ぬま村といふ鏡とぬまの文字ありてや見ゆ爾よりい
人民のいふく集りて一村となれ其のみと當所乃
鎮守として社と建てまのり其後いつの時代より
兵乱乃為中紛々しきりよし物ごとりと聞ぬははに珍き
不思議なり兼を有るありか其所の右老ヤされり

桑折乃蚕

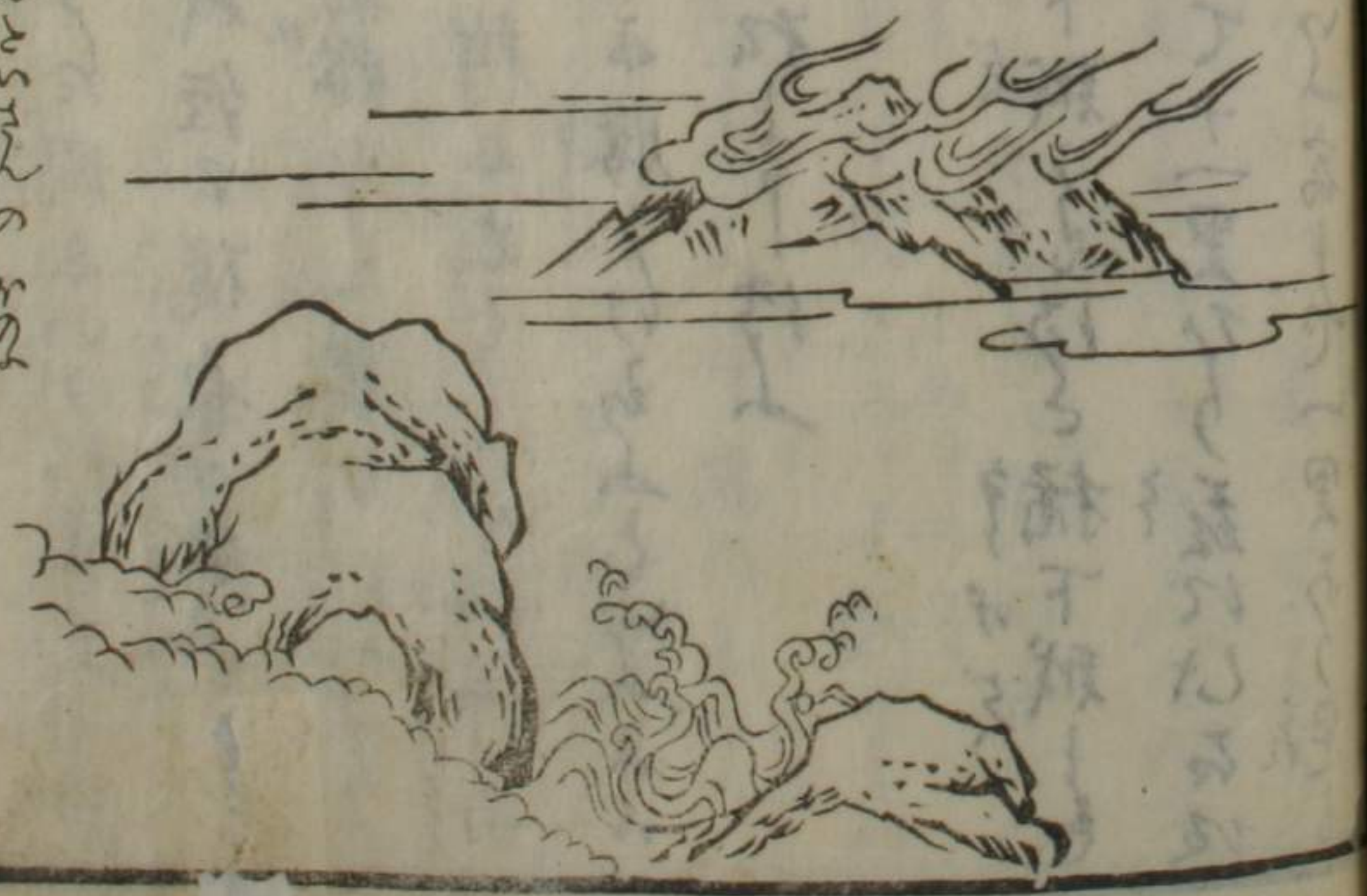
陸奥國桑折宿の町乃長さ二里ありて遠て家居いづれ
となく人寄集りて交易市とあり大都會にれとぬ
懸花乃地なりとて停達郡といふともいふも譯やうん

文字かへ奈折と書たりけ所の蚕とやそのまこらん其種子と
 採とらく諸國まよこくへおれりふ蚕まいりしりく上あづまふかり固こく日本一の
 名産なひんと賞しょう員いんとしやうびふかゆふ諸國しよこくより人多く入いるを
 蚕ま種こども其綿まふ乃蚕ま賞しょうふふと野やま野やまねけ奈折宿より
 右へ移うつりかた道の仙臺せんたいゆく道みちなりと左め道みちあり小坂こさかおん
 とよひ街道かいだうの秋田邊あきたのへへ乃通路つうろおれり是こゝぞよついでに序ついでありと
 彼かのくへまつりりしゆ其道そのみちくれ名所なごころ右跡みぎあととけけむいふる
 け小坂こさか越乃味こまを二十八町にじゅうはちまちあり嶺ねか垂たげありたふ不動
 明王めいおう乃御堂ごどうあり是より奥川おくがわ街道かいだうおとくく目の下したか
 入いりて其風景そのけいざいありく筆ふでのおよぶ所ところかありけ
 判官はんごん腰こし愈なほま

旗竿竹



盤大山之炎



日所素折宿より藤田宿まで一里七町あり其間
大乃素あり街道乃左の方小うね岡かいくに年久しき
右本なり往昔九郎判官源の義経公梶原が讒言を
録舎とせむら終むらゆかよを定非なく奥州にぞり
秀衡が館みつせらる其時い在所か志ざうくは津面
ありし舊跡とらあがらにけきみ腰けあふといふみ
あづび只その名を残とるりの松とす傳ふ

材木名

奥州乃右坂越といふ木より茶良下越ともゆと楢下越とも
書しし所いあづびかふらめて十一里なり茲にい右坂
より上戸込といふ宿より下戸込といふ宿まで一里あり是れ

いふ山樹るしてまきも甚なん所かりけ山の悉く思むらり
を祇木枝木れどく何きもみす角より略くを尺や六
ふ角物なり長短ありやいへとも中めを長きい其うと七八
十間むくりあて討ぎに其か大貫中貫小貫小割もい
討す角三す角ふへ其ま枝木かとうとごふ奇異乃ふなり
ひういひ思山の藤と往還と志まらるが百年をくり以茶とや
地震おけいふりぎしよりとふ乃上に道と付しや名林藤の森
の甲に寺ありあんに飛不動明王の堂あり柳この不動の
けいりき一時も寺僧み怪我とせまどやうく虚空と飛行
ゆいまして崩おらる思とさく給りゆ人傍身一人もけが
あやまらかりとて渴仰信心なり奉にふり今もかと

霊族ありたるに山々諸人の系譜あり

賽乃河原

日田下戸澤宿より渡瀬宿までを里はずありはあまの
川あり星をけりて川とよみ常のすじの川を流る
瀬川なれとも全解河原の幅十町余あり出水乃時
河原ふかからけり蒼々として海のおとす 茲か不思議の
事ありは河原乃石おのれと五重三層の塔と認めたり
東西南北入るるに其敷所に分りて幾等といふと
たし大水物と被塔くけり流るるといふも水やうと後
一夜の舟かゆと塔と認めと申く人作舟あはれは来むじ
よと今舟けるまぐかりを来かき一因て賽の河原といふ

山伏岩

右乃賽の河原より見れば西の方かふあり其半ざらぬ
大きなる巖二あり一と女郎岩と名づけ一と山伏岩
やういふ二の岩いふも山より遠舟とされ物く今舟も倒
落やせんと思ふなりと里人の春之四月のあらはれ岩乃上
敷そのと持杉酒宴遊興とたれといふたもあづる一平
たしく凡系した所なりと冬十冬をくりの平地ありまこと
女郎岩もかくれおとし時舟いふをゆくとや女郎山伏の名と
何やと尋たれを里人の舟あづり藤より足給ふぞしや
いふまうせ舟其人と連ざらふとをさうおしけきううんれ
いくにを其のしら一山伏岩といふ女のすうと舟いふ

三日月石

門田所の後山中街道み瀬本宿より峠内宿の間より
 田畑の脈の流溝あり其側み三人むりれ丸も三日月石あり
 三日月の凹あり是と三日月石と名づけ諸人余詣して合掌
 涸仰して礼拝とかたいう事業やう人と其所謂と呼ぶべ
 里人乃曰當所の者の勿論はあり進御の中に及びて園境
 邊までれ人の眼痛と煩へ必ずれ来りは石も立願と一人
 せも信ずぬとよ人かしね平念の忠謝の願をぞやうと持
 其のくは溝門へ放やれば一衣の才に其難どぞやれ片とれ月
 と塞なり固ては所乃魚のか片目なりととくはあげて又せ
 せりが去るも不思議なりうか妙と禊のせし

銀山之茶屋

門所湯原宿の休所の茶屋新をからておき
 四季やもみ醜酒と家ぶとに高み取るの夏のあらわ
 山より流りける谷の家の茶乃小さぞ乃流み醜酒を
 籠をとん押さ水もちやして香かりと早冷くせて
 あらわらん至て甘く一入風味とらしけ湯原宿よりと三里
 ゆけバ出羽奥州乃園境桶下宿といふ銀山といふけ間の
 宿といふとも山中の稀から家作りた側みこのみ新あり
 いけも後乃自然と庭みちの竹のかけ植ともつて
 滝のながれを梅風系月とよるこぼし草とかつて興あり
 け所の名物す松茸と高みけをけ水に漬けて料理也

長行...

七

流石の白く給いやして流石の生草はどと

出水乃跡岩

羽州橋下二十八町坂とてこれに宿かり是より上乃山宿まで
二里かり其間由西乃方これに屏風とてまゝなるをいして其
言とて之失あまりと見ゆる山あり長と一町半をあらざり
は山よりいひし螺とやいひし物ゆゑ山裂破とて大流ありと
なりきりより茶本とせせだ新のおとく真すぐに屏風とて
たゞやうぬぬと上より下まで水乃流るゝ如なる堅すとて残
きりとなり今も水流るゝかといふる物とぞ

上之山之温泉

日国上の山宿乃温泉の後乃御城山より涌りていひ

所乃とてごや乃中村在湯とて内由湯治場と名づけけ
石とて築て三間由武間むりの湯海ありを産産奇
業めてこれ宿なり諸病よきとて湯に入る人多くあり
旅人の昼とて後とて滞留して湯治するをいひゆきと
表乃とて此屋根とて山より六間由武間余の湯ぶひありて
往來此人の勝子次第由入湯して終とて入つてい宿の入
口の坂とて家作のいもむけ造めて茶屋も七軒もあり
風景よき所なり此方よりか大由山より里人の話由いひ
は山由鬼神住きりとて巖窟の洞乃由由とて野と
おとれたの石乃座席ありけ鬼神の勢川鈴麻山とて田村
將軍の者にあらびたりやや仍し物に東夷の強賊住る

そのあつ人もいふ山の嶺へ登ると二里八町あり大きき岩あり
水かじくやしてふとめぐる流るるに三日三夜ありて葉の
川へおれ落ちる里人おれと談るに何なりやと被沈み入せき
ゆりて待み案乃ぶとく三日三夜ありて彼川へ流るるをいふ
山縣之花市

羽州最上の山ぐこの町へ入りて山口まで家形とせし建後

二里余町ありけ所の名表とする物の漆睡蠟紅花是亦あり

中を紅花の市とて夏の花乃さうりぬは古坂といふ所より

下といふ所まで十一里間の存る谷々いふ紅花と作て管と

する是と山の四花といふ物とに揃くは町の花市へ持きてつら

金銀穀物ありは山とのかう不み走きあくと交易する事あり

日老美男女群集とて夥しけ紅花と常販人と

花師といふ諸國より入るる方り事あり是と俵ありて

京都ありて大坂まゝの御當地へも送る事あり

浮島

河内最上郡ぬ佐澤中つし所ぬ大きき川の沿ありて見れば
何れど有やうんちるべ九三里四方のやうに是もあつて浮島
ありけ流の日本六十六ヶ國をわたりたりといふ流の志ありに
有志まの蔭蘆ありあびて蘆原島と名づくは流の初く
東かゝ余の流の常に汀み片はき成り向うなるるに
恙かゝ更し浮島といふ人む何れも松栢あり志がらりは季の
花の草木とを咲かして目とよらるるにひる筆筆りて

長丁...

書つじびびい浮流の春夏秋三季の間の毎日流るき出て
 遊めぐるなりそに不思議なり来ありたよ風の如くより吹
 といとも西へ吹ぬありは東南西北のれくがなまにけり
 凡そむら風もまじぶ自由自在なめぐる天氣晴快乃日ぬ
 六十六流うみく優々やあそび回りに又都所の妙あり登り
 停暫の園乃人ごが園ちそ席くれと念念ずき遥むらみ
 ありし流その流く回る流くを押除く其人の茶もよる是を
 見るにいつるも停暫の園ゆく見みたる風景乃流るをあり
 みる誠し理外のふとにそ乾坤造化の妙なる理とびく
 押登るは所ゆけて其奇なる来と又るく
 水晶山

門園最上宿より天童宿まで武里半なり是より奥に
 乃別道を山を越といふあり亦二里余ゆけば堅固宿
 といふも奥の奥に乃別道あり是よりほこ二里半ゆけば
 東宿宿といふは街道を俗に冥宿越といふは邊乃山ぬ
 すぐく水晶をけげといふはれども俚談も水晶と扱取と
 山神たるとかたと所の人乃語るは冥根越乃山弁に
 弘法大師の住まら難行苦行の勸を修し給ふとて子
 洞あかあり其弁と辨なりは日ぬ向いてんまは牡丹芍薬
 其弁四季乃草花と彫付あり日ぬ輝き映して其むら
 戒も又とて新文とるおく美しき来ゆもるる
 又つらに水晶乃弁あり是弘法大師の住作と傳ふ

旅記二之巻

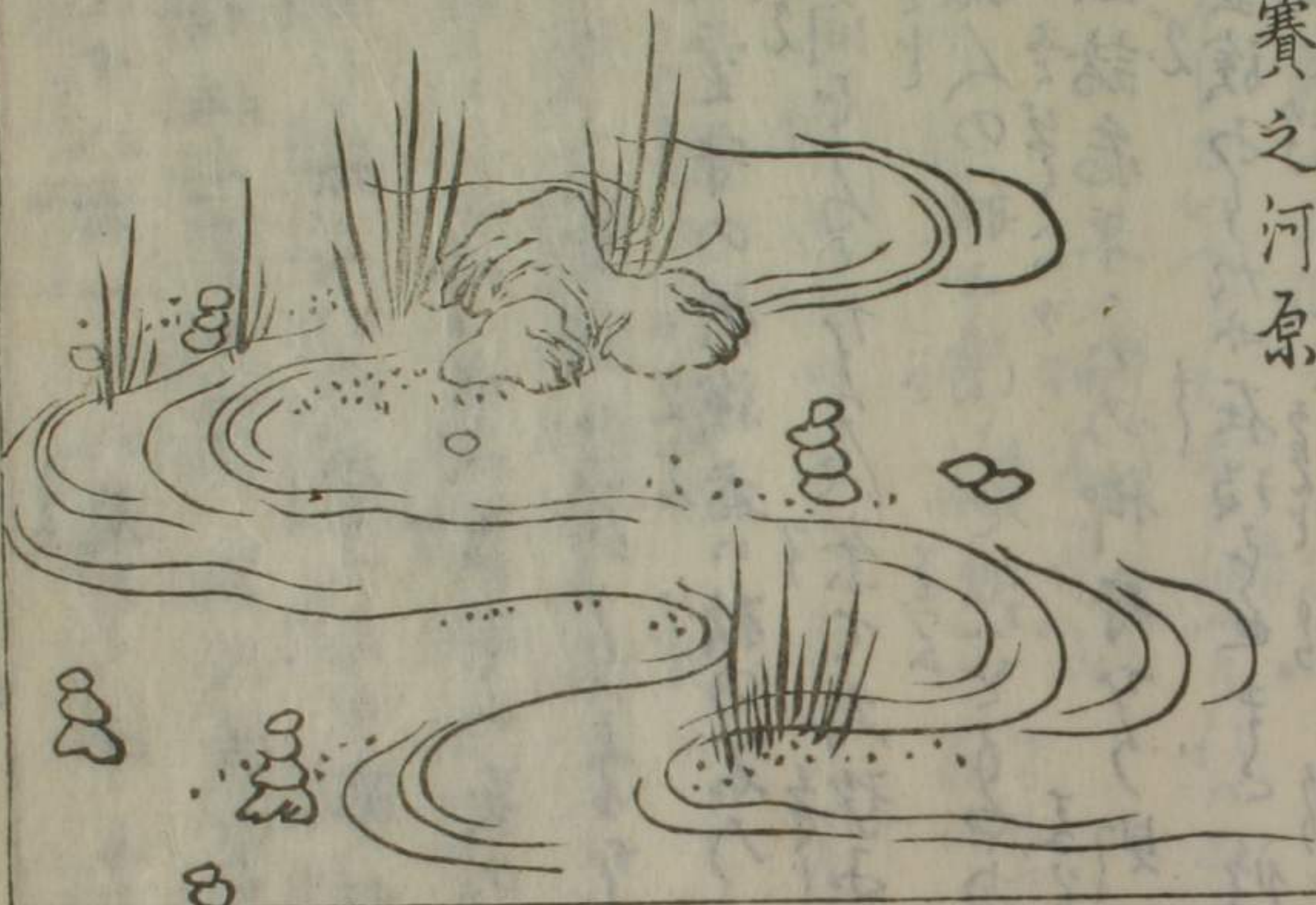
十一

すしうゆくもるふれい川水乃流る幸しゆて早く
 来る流る幸矢しゆもくわし山をうける川ハ河也も
 斯乃おとしといふがうい川の橋所を今あるゆ今
 たらはら河原一面水と多たう早来流乃文字を
 まりて早来流川をさう川と唱ると教られり

仙人堂

日国最上川乃川邊ありけ川の流るき幸ハ日本一
 せし大石田宿とよ所より秋田へ行たぶ人の川船あり
 相貝宿鷹之巣宿古口宿清川宿まで十六里乃間
 其かたれ早きと矢を射るがぶとく三時むりに清川一
 幸あり又濁水乃時ハ一日もかり幸も有とくやけ川

賽之河原



十八尋之杉



日十八瀬で十八瀧あり中母を白糸の瀧とて名所あり
 板仙人堂母一乃不思議ありけ川ありふれゆ人船母は
 合を旅人か乃堂へ上る賽銭と船舟より渡へ移人と
 ちくふ川中へ流と一袋の舟母は堂の主人母石垣あり
 け所一賽銭母のけくう上る舟母昔より今母かうもあし
 又堂守の修験者ハ板の本乃大丸を舟の形母彫る長
 三間むくむなるに舟母大移子の如く舟物と揮やして
 旅人の船中潜しを脱とりやわく御礼御符と授あふと
 又諸病平金の御守かり則仙人大権現と拜しきり
 靈験ありた母在はるをまきと修験者の舟と日どやうなる
 舟に舟てたれ商人餘と舟に舟るけ女は團ぶしとて嘆
 と訊ふ石風ありて舟きりわしけ最上川の名所して古歌
 多しといども幸無かれはあにきりし畢

柏木原山

日所最上川乃舟はさ右に宿より尾花澤といふ所へ
 あり街道去の舟乃山母に余乃樹木ハ望し舟もふし
 柏乃本かり出所ハ延文元年八月六日修理之右史系頼
 出羽の按察使將軍舟補任せし最上郡山形舟入部あり
 まより八代目義光慶長年中あめく合戦一軍切を
 あらひせし石戦場とて又いふと十日町とては黄金原と
 いふけ所母長者が跡とて石牌ありては原舟こがねありと
 假名文字とて彫舟ありしとて今更いふし

十八号乃杉

羽州松山よりを里九町奥に新城へゆく山越乃すこ
 脇道に泰成山やうま言宗の寺ありまより武里にゆく
 鷹尾山といふ所は百合系大石乃廟系山乃上にありけ寺乃
 境内に杉の大木あり杉系も又出て三町四方にありけ寺乃
 山のおとく其あより石と敷あつたなりと思ふけ杉の本の根
 板身本乃右と十八号といふほどを基ゆくと見ゆら因て
 扇ともけ尺とく其始より終るを以て印を付ていどせ
 ぐは二十八号あり十八号といひくの一の葉ありぐは百合系大石乃
 山麓にありし磐石印に極みらる杉なりといふ鷹尾山と
 いふも其謂かりともも茲に不思議なり葉あり所の人諸病

平念の願とけ杉と新杉をすれは別は氣入まこ一つの不思議あり
 信心ありき人いへ本に奉て七齋の羽と拾ふ葉やしてんり
 其羽と諸病のいひ本と極みらる杉に忽け氣と得るはとに奇妙
 かりと亦大乃杉の大木へ近御隣村を人を助ゆふ名木なりと乃
 子細に此因雪ゆふして十月より春八十八夜までハ雪よふどし
 諸人往來かき雪よふ家とくけいじ因て雪垣とて鹿のやう
 物とすく隣じくは乃通路とする町はきい軒下とありきて
 寺町にゆき不げ向ふとあることと通ふ雪垣とすくらゆる
 かやとの大雪と凌ぐ葉は新と秋のやりに切ため新た免て
 近御隣村乃人かけ杉の本の本の奉母積おきそ雪の中を
 凌ぐけ杉枝系すき間なく十町四方雪とぬせく葉

はふとに神変不思議乃大本を名木といふもあつて
愚ちりしまゆりらつては

東國旅行後卷之二終

東國旅行談卷之三

○同録

- 八幡宮之矢之根 やのね
- 黄金之砂 あまのすな
- 天燈竜燈 あまのとうとう
- 飽海之神軍 あふみのかみ
- 飛鳥之鱗 あしのうろこ
- 困風俗之五節句 くわいふうぞくごせうく
- 坐良梅 ざらうばい
- 根曲竹 ねまがりたけ
- 象瀉 きさく
- 五色櫻 ごまきさくら
- 盆之踊 ぼんおどり
- 月山之刀 つきやまのやいば
- 八幡宮之神事 あふみやのかみ
- 祈山 いのやま
- 暑中之雪 あつちのゆき
- 花紋燭 はなもんろうそく
- 鳥海山 とりうみやま
- 芝祭 しばまつり

○霧山

○小町村

○一五夢之蛭

○一夜杉

右二十二詠

卷之二 月録終

東國旅行談卷之二

撰者 青鶴齋書

八幡宮之矢之根

羽加松山より二十町をゆるぎぬ大なる久らき園山あり其た
 石前後より田んこなりけやまと石名山といふ入りかやま
 せもつる者ありけ御山正八幡宮の御社あり靈驗あた
 めて人民と憐れしゆきて五穀豊饒なり茲亦あき
 かりゆ業あり冬にけり雪霰るど濃く烈しき業あり
 いけとて時日乃定りもた其折節に其近き乃田の才
 畑の才やとぬ矢の根あり飛の柳葉かりまに鏞ホトて鉄
 母もあはれ石もあはれ久らき園久らき園氣まに白あはれに黄

旅行紀三之卷目

年により久母神くありとる足と神の御矢とらやまし諸人
くかつて崇恭しきりけ御矢と拾得る者い必さいい有
幸うごいふいとやをこれと拾ふ人の穢らうとよ

久母橋

羽州雲山の庄中芳曾光寺の境内あり橋いりにも
名本なり只一株の本母花の久と定く咲かむ橋久中かを
多し白あり橋久らるあり濃紅ありね橋久といふ中に分ら
わらひ母足を久母橋といふ其母を給くやして七八町主人
より風のさとし母と春氣ゆくならん化して旅といふれ茲か
日とらりしぬ奉堂とねをなれば御たけ壹寸八分乃 溜浮提金
乃茶所 橋橋光如來とていづくせ給いといふ有るく殊勝なり

此の像なりと縁起由未ありといんとを之を略とまこい橋
似る梅乃花ありまを武明乃内いあり諸人おやくいなる
同く序ありとるに武品那河郡小平村春與寺の境
内あり花の久い白紅い二久多しね黄久ありけ介の花い
とふりて梅うしき花なり久い青し花の字と橋の葉の厚さ
その中あり葉のいとを以て花の縁とらりたふやくれ花ありこれ
至く奇麗なりとい梅花いげさも白の葉の蔓乃ぶとく此
むらかの介あり一節けなり是も久母橋といふらうりの比ち
風の吹みらうと入の十町むらのも白く亦なれ名本なり

黄金之砂

同園庄内鶴が岡御城下と過る年やとを二里半むらり

名山あり金峰山を新くけふ乃砂の見よる所残り
 金乃ぶじしむにすらくくふれバ常の砂まじりてあり
 ちれとふれ上載てゆりゆりの只乃砂のゆり色散る金
 乃砂むりもた残りきたに不思議なり年ありけ金の砂と
 旅人共困へ帰てふかしの種みせんと我もくやせ
 ぐらつづ紙みけい懐才してふとくふる藤乃里にあり
 休所の茶屋に立よりけい茶屋のありいふやう何きも
 御山とて定々金砂と取くふふらん共けいことわけ
 見た主人金へきくをせり作らんといふふより而く取切
 印さきんぐらに主の詞乃ぶとく只乃砂とて有きる是の
 いたと奇異のゆふとやいふが山神やませぬゆ
 斯のおやしと語く共おけ御山の有るに事やとてか
 け色ども其御まへたんとくくゆり

盆之踊

旧所御城下鶴ヶ岡の繁昌乃去地めて諸職商人軒を
 むく々賞賞乃とておまこい取替そらぶんの音と響せ城
 三郡おちとたは茲お例年七月七日より盆おどりと名付く
 表てた踊とそらうに幸御に乃祭禮のおとし年々趣向
 新めて音頭つぐり共唄文向お花とかざり風流とまじり
 其妙筆に盡ぐしねおどりの姿の共観くと分れて同印
 たとて謡踊つれバ靴お謡奉など御にたふだのぶとくお
 持来るおどりの姿の高砂田村熊所班女袴飼ホの衣裳とて踊乃

身ゆりのかたれども掛多手物まへにけり
其外道者踊へけりばと笠と 大名踊へ致はく
印とまゝ十五人げと一担といふ其趣向あり十八九人二十
人もわり装束つれども奇麗羨と相し目とせりる事
足と見物し是と踊しゆんと思ふ家おの客とりわけ花笠
毛せんと交杯酒お肴菓子ふりおとくお響直て家の表お
纏てうらんと焼し焼しけり事あり七月すおまたおおとた
賑しく社来の人夥し音同くこと隣國まで庄内びとを
称羨を甚おしゆき事おとかり

天燈竜燈

日新より賣里余あり 大山の善法有といふありけり御守あり
むくしより七乃不思議ありといふ其一は毎年四月の歳日と
し定より事すもなく天気がわく日和ほきて一は
うらりちりおのり刻より世の刻まをの間おのり天燈
天をら事同基より数百年の今も様ひりのおやしきと
竟燈おがり時満月夜光騰くやして風波すじありき時
やうや其刻限きまらばとといふえよりけり御守乃服すから
海らふしと山とけりなり山の洞お洞あり伽藍修後又の
造営おありけり住僧おの洞乃おおかく御経と讀誦し
作事入用の礎を一紙お書けり其洞へ入て帰守せりる
其翌日海邊より洞の中人まをい望のおとくなら石とがら
あり事人足とをりて運たるおとしやし是すから竟灯

賜^{たまひ}所^{ところ}所^{ところ}かり今^{いま}も愛^{あい}と更^{さら}かふ其^{その}介^けの不思^{ふし}後^ごも
 聞^きたし空^{そら}思^{おも}ふ不^ふ秋^{あき}乃^の日^ひの久^くれやとく日^ひ西^{にし}かつんとするん
 道^{みち}を急^{いそぎ}て聞^き残^{のこ}しきり火^ひは末^{すえ}をきしぬ

月山之刀

出^で羽^と乃^の羽^と黒^{くろ}山^{さん}湯^ゆ殿^{だん}山^{さん}月^{げつ}山^{さん}去^さの三^{さん}の御^ご山^{さん}の日本^{にっぽん}第一^{だいいち}志^し
 靈^{れい}場^{ばう}めしては三^{さん}嶽^{がく}の御^ごいと中^{ちゆう}の諸^{しよ}人^{にん}乃^のよく感^{かん}得^{とく}するこころ
 方^{かた}いば今^{いま}更^{さら}いよおよび茲^{こゝ}か今^{いま}のひう〜慶^{けい}長^{ちやう}元^{げん}和^わ年^{ねん}中^{ちゆう}
 乃^の以^もとる月^{げつ}山^{さん}乃^の藤^{ふじ}の里^{さと}に刀^{かたな}鍛^{たが}冶^やあり日^ひちり大^{おほ}権^{けん}現^{げん}と信^{しん}ど
 奉^{たま}り一^{ひと}心^{こころ}不^ふ乱^{らん}か祈^{いの}念^{ねん}して刀^{かたな}とら御^ご加^か護^ごあつて功^{こう}を味^{あじ}
 へかよよし其^{その}出^でました物^{もの}か銘^{めい}と月^{げつ}山^{さん}とさる是^{これ}まきとせれ人^{ひと}
 よくおとる也^{なり}今^{いま}をば御^ご山^{さん}乃^の藤^{ふじ}か彼^{かの}鍛^{たが}冶^やがわらる刀^{かたな}何^{なに}果^はの

八幡宮之矢之根



月山之刀

表行卷之三

家あり旅人との刀と借て堅本ありんハ根木まきこもぶゆを
石など切たれぬ石ニツツみきけり事妙なり去程母刀乃
忍すうそぶかり事かし是まこ不思議ありどや

飽海之神軍

門國庄四領なりけ侍社ハ金輪魂神トテ大物忌右神ヤリ
事りけ社頭近きい年母一夜は軍の日せもいん又神の軍
やもいよく基みそり事なり茶にあらぬ松山の八幡宮乃夫
の根と日どやうれ矢の根雪やうとにまうて風ふげり三日降
あれまき理介の一案いしと論どぞうい當國ハ高所と松山と
二箇所ありて同日にあらぬい事能登の國母もあり常陸乃
麻海にもありやうや於足矢の廣大なり事とあらべし

八幡宮之神事

門國同所酒田とい所ハ町なりと海邊ハ山とわたり長藤
と町ハ建ちて千門万户いしと齊くまき人眩しうい不を
船町と名はきて松州大坂より門國中國西國九州二島
乃商人船いさか茲ハ美岸一東奥ハ陸の産物と交易
まき利潤の奪買金錢の取列ハ市と也町乃繁華なり
筆ハ盡ぐし當所の鎮守正八幡宮と勸請しなり御社乃
結構美と流くし石乃鳥居ありの掲げれ金石乃燈籠常夜
と照し諸人信仰ありなり神威まき盛ありて毎年四月
中乃申れ日とい御神事祭禮あり去地ハ風俗トて町中
あく日刻まき當番とい家あり其家ハ去来ハ暮し

言つてく祭乃屋臺はく物の類向と巧し他の人み偏志は
 やうに密く舟板ゆり奉り七細工人と扱は是と作らむ主人
 日どやうの奉る時やめておれもは一興とかりやうやね屋臺の
 大きこの武間中二間ありと地車に志る作物と載て引おそり
 浴衣まや物下き目と勢は奇番はて花やりたり屋臺をの
 め十人ごりげゆき引奉る祭當番の家かへ一家親類をりめ
 懸意中其介家族も至老目出度と移り贈物とする奉り二
 日主人より見せ店かざる是まと思ひくの作り物なり妙後編緞
 錦の類とりのて花のい道具の類とたるに扱て大きこの二尺
 六尺七細工善法は美とけしなり子際かり家々扱とあつら
 毛種くかこ金の屏風かみ映してはむや見物のは其群集と

かの當日のり獅子雄一對とくやし立て大勢祈りあつ
 け獅子頭へ祈は則て家の表か立まされは其家のまうまの
 庭か下りて相うらげ御機嫌よとつて禮拜とされま
 家毎にあつた古来より如斯か立より拜と受る家ありま
 家もありとやね神輿けり祭禮すそ其夜五時か
 本年の御祭乃當番と山王大権現の神慮おはせなりと
 所の若者中教百人山王の御宮へ参り獅子二頭と供奉し
 参りおれま見物れ人群集とたけ町々家々か我や當番
 かれも當番ちう人と燭臺と照して待らけり中か我ふそ有
 申と待らけり心も少た家へ獅子まこは是と来年の當番
 や定む家々所かりおれつてかく冬よりとまうけり奉

カレ共きうびやなり年ふれと察へへ

飛島之鰯

日所八幡宮乃御山へ屯て海上と見つてせば蒼海漫々
わして碧浪天と浸し遠帆霞と隔く帰帆あはれ巻そ乃
風系りろき所なりけ御山より八里ありわびりあり
小舟あり飛島といふ漁獵乃小舟あまきく細といき
長縄うけ釣あらしの鰯壺なりと頼く取らりきる鰯を
えれいふ六より一丈まであり是とて坂田の町を高し
旅人土産物やして家土産母求む水舟漬みいば甚やうく
口斗持母一くもかたる鰯あやけらき鰯なり

祈山

日所の町をのりき南乃方舟あり最上川のながれあり
海へあつる所の川多なりと共いふ小き山ありこれハ
ひく日向園乃山伏羽黒山ハ竈大願とおつて行は人ハ
越たりや不やの我をらハ徹せんとい物と祈ハ決定乃ハ
かき思ふ園とめぐり奇特とあらえんと終ハ祈ハ出り
里ハ海度の岩ハ山と祈ゆて行はの徹通とありり里人ハ
えせらるといふ因て祈山と稱くと云傳ハまことハ乃裾と回
川ハ鰯といふい餘多えゆゆハに異名といまう山とをい
よし里人物ごりきり

國風俗之五節句

日所の町家存くまで古風の作はありは昔ハ日本國守

上表下表

かくれおとくめく有りやうやみさる向くもか二方と月ゆる事
 正月の椋子 草薺 藻陸草 根松 菽樹子 芝朶 哈積堂
 かり當所の海か海光色 寒圃心 蜜柑もなり三月の
 桃乃花と草之餅と積合は五月の粽と三方の内一はりやどに
 ちうらて五ッげ 把て載る七月七日の梶の蒸とちうそま新と
 載る九月の菊のくかみ餅ちうとちうかくれおとく 家内か海光
 松竹も宝はくしホの月出度まやうと條る暖簾と中乃間か
 二間之間むくりれわいごかひけく子代麻上下と蒸し其まに坐
 件乃三方と礼者のまに叩て礼を受るま正月十日か大あ
 本の枝か和菓子と結竹く井爐裏上かかざり廿二日にあり
 ちれと柳中にして夜義とん足五穀成就乃祭とる

暑中之雪

日所乃町か肴店と一町半むくりと左右とも魚商人
 とちうべて市とちん六七月暑氣冷天の時合の雪か漬く
 肴とかう家く乃肴返くんきう桶あうい箱ぼの泣か
 んれがまか雪かりけ雪と高めせとける人あり雪れま
 長三尺むくり幅を八五寸四方か石と切なるぬし尖と三尺
 むくりなる板か載て捲くと縁り背負く賣に來る其あふ
 三十錢むくりげに高ふ事あり其くたんと石乃ぶとく是と
 碎て肴と漬ら鯛ゆめ其介いらくありけ雪のつぐくより
 持きくろやと身まねば西南に山ありく日露乃海濱か砂と
 堀く夏乃考に雪がけの時節よりかこ力置いとわたりま

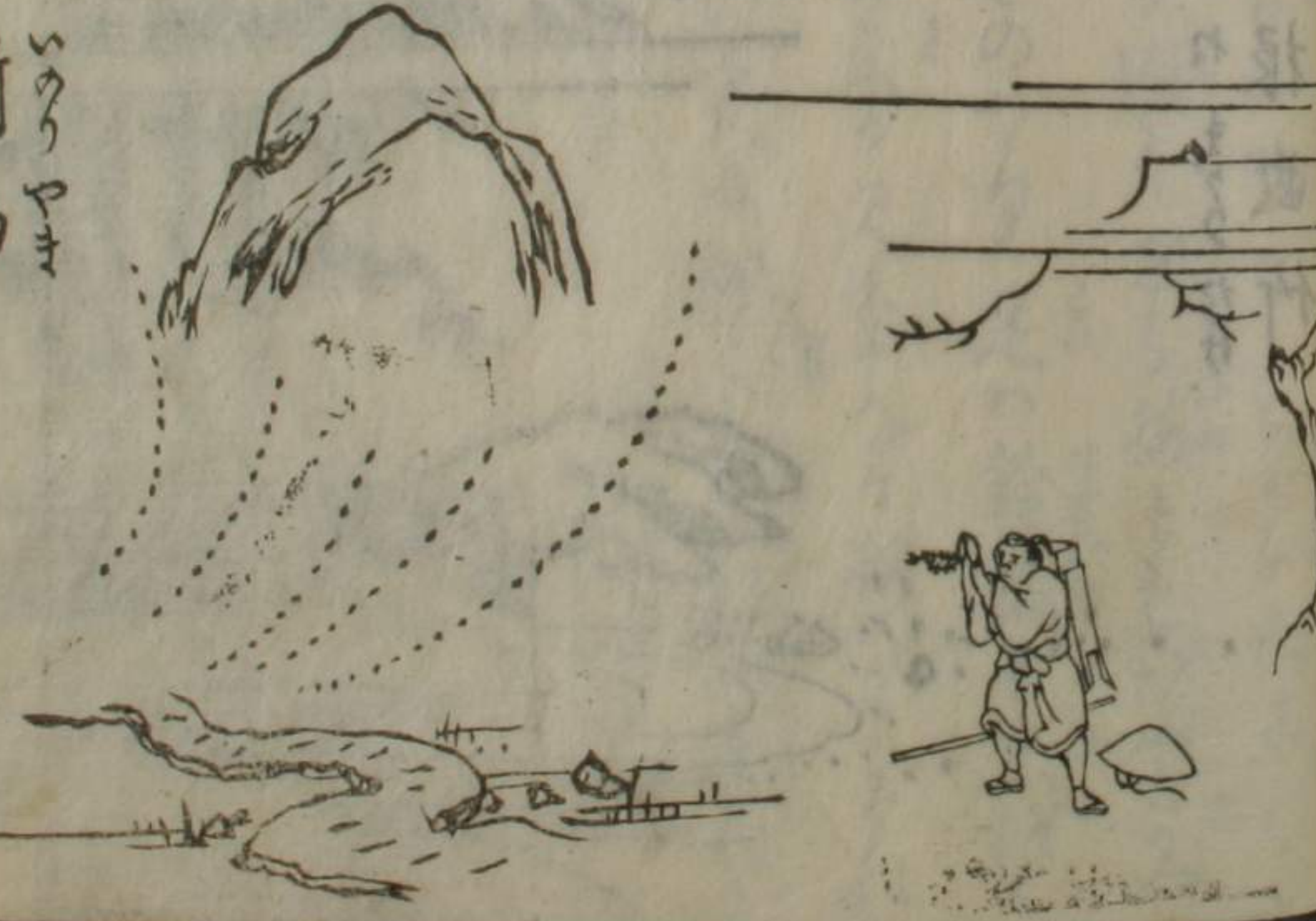
天地の廣大なる事と云ふは雪と春と業と亦所々ばや
ざら梅

日所町をめぐりて事半里をめぐりては御領主乃御領町
ありけ所と鴨渡河原といふ紅花乃上取の地ありて夏
紅花さうりのちりの毛禰と敷法ゆるおとく甚なりるき所あり
茲か當所鎮守乃宮居ありけ境内に梅乃古本あり大木あり
あつ孫ども其くかを持事みせし実ともの事もはる敷
因て沃山ありて事と園の語めざらやう長し一柱ありて
おとく梅の梅り付るおとくに咲く流花の如く久しす時
梅花乃山ありて方に甚く西の海とける船とてけ花のさうり
とらとつ亦実のちりも梅り付るやうにて枇杷葡萄うと

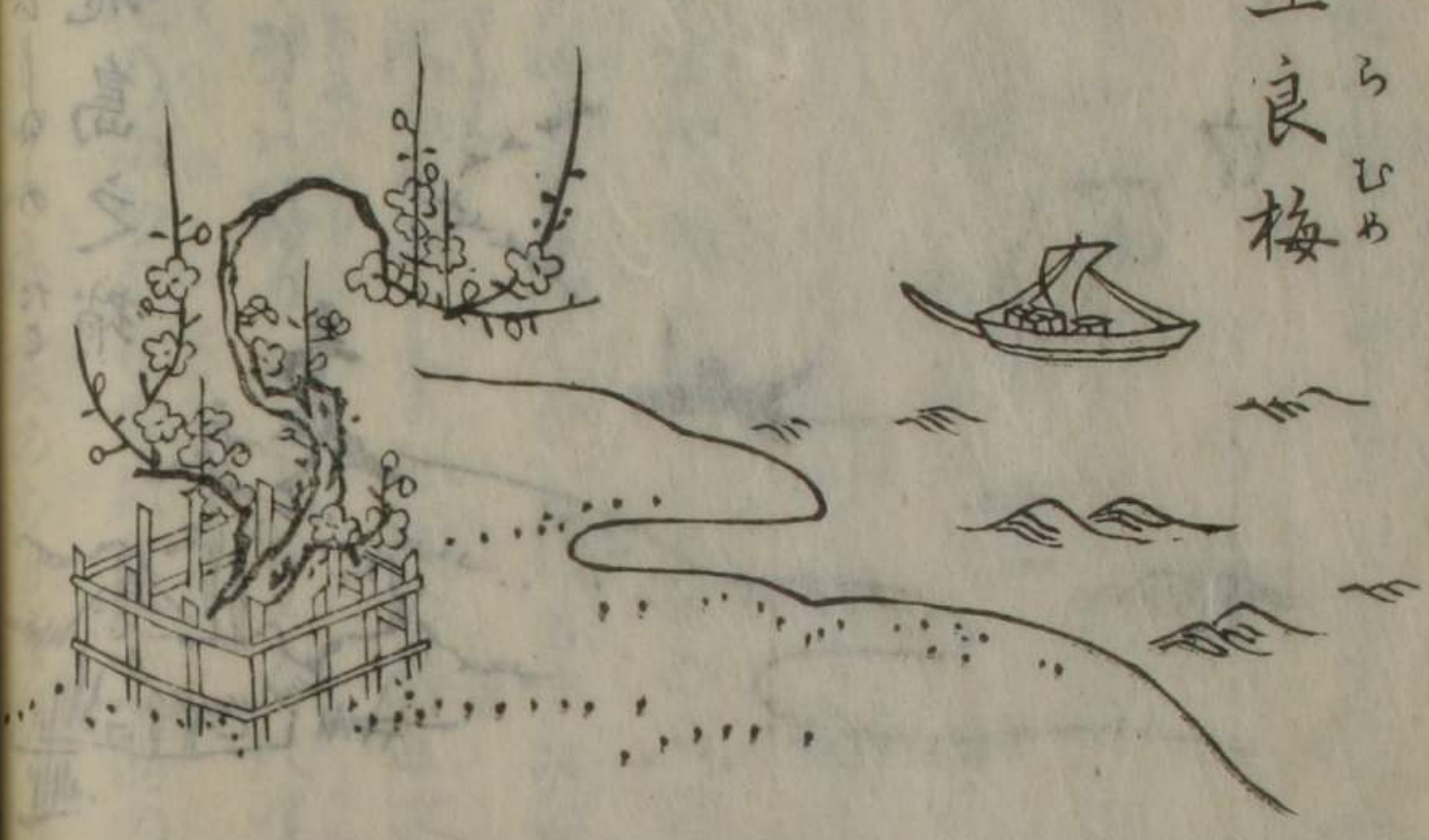
飛鳥之窟



祈山



坐良梅



ねまろ竹
根曲竹

あやしむ赤梅^{いらか}や^{あや}や^{あや}ても^{あや}常^{あや}の梅^{あや}とら^{あや}ぐ^{あや}肉^{あや}あ^{あや}け^{あや}き
い^{あや}あ^{あや}黒^{あや}ぎ^{あや}れ^{あや}と^{あや}ざ^{あや}く^{あや}く^{あや}や^{あや}かり^{あや}同^{あや}く^{あや}ざ^{あや}う^{あや}梅^{あや}と^{あや}毛^{あや}い^{あや}と^{あや}や
亦^{あや}一^{あや}種^{あや}大^{あや}の梅^{あや}お^{あや}似^{あや}る^{あや}梅^{あや}あり^{あや}毛^{あや}の^{あや}かり^{あや}と^{あや}是^{あや}い^{あや}鈴^{あや}梅^{あや}と^{あや}名^{あや}は^{あや}く
三^{あや}番^{あや}豊^{あや}乃^{あや}毛^{あや}い^{あや}鈴^{あや}の^{あや}お^{あや}と^{あや}く^{あや}に^{あや}物^{あや}あり^{あや}又^{あや}来^{あや}り^{あや}梅^{あや}あり^{あや}と^{あや}れ
や^{あや}毛^{あや}花^{あや}実^{あや}と^{あや}毛^{あや}白^{あや}ん^{あや}か^{あや}い^{あや}づ^{あや}梅^{あや}の^{あや}実^{あや}お^{あや}も^{あや}小^{あや}は^{あや}り^{あや}と^{あや}花^{あや}と
相^{あや}功^{あや}か^{あや}い^{あや}は^{あや}り^{あや}奇^{あや}なり^{あや}花^{あや}実^{あや}なり^{あや}

花紋燭

日所坂田乃町本町武丁目何^たぐ^たの家^たと^た製^たす^たる^た蠟^た燭^たの
来^たなり^た今^た三^たヶ^た乃^た津^たと^た毛^た製^たす^たる^た鈴^たら^たと^たく^た又^たい^たら^たか
蠟^た燭^たと^た毛^たい^たま^たの^たかり^た當^た國^た當^た所^たの^たい^たら^たら^た蠟^たの^た日^た本^た第^た一^た乃^た
名^たを^たあ^たり^たて^た至^たて^た文^たを^たら^たく^た雪^たの^たお^たと^たら^た蠟^た燭^たと^たす^たる^たに^た燈^た油^たと

旅行紀三之卷

用しどして終つる流りき来りく綴つたがれ落くも物に付
来りし彼契白かり蠟燭五支の燭の具より以て花鳥
山水茶本花実和漢乃人物美女ホと云がれ其上とまき
清白ちり上品の流りく蠟とつけて磨つればさねがら水晶の内
繪と書るるがれ火とやをばとに玲瓏として件の繪とまき
さう美ありて且數なり故に度大人も是と玩弄するもや
固く諸國の旅人これと求めて去れし其あれたる家の門前誠り
市となりて賑やうなり

根曲竹

日所ぬへたき竹はせむ六里四方さか杖のすじにきまか
思ふ程よく形は寒竹のぶくちにて宿より六里はるが
けし川をり周く根まがり竹とよみ月翁と云ふ其るる食すら
根まて和りありて茶葉を分さうあつて才かたて厚くま
味は甘く一箱の名物なり桶の掬ちんも成やと身しげ七八
里より少く大竹あり其所より商人持きうと經り

鳥海山

酒田乃町より三里水乃方ぬえゆり高し山ありて嶺まて三里より
頂上ぬえ大きかり窓窓あり繁ぬ鳥海山大権現の御宮あり是の
名れ海の跡に郎の靈と祭る所なり此所舟川あり矢落川
や名はく往昔八幡太郎義家公た乃川とるごとく陣と取
矢軍と云ふぬえ舟より矢落る名と残るものなり奥州勢れ中
考れぬ片くの眼と射られたる来りし諸人乃たる所より其因縁

あぐは川下乃魚の如く九月の野田なり赤川の上舟すし魚を
目つものぶく時舟は山の舟り舟魚を喰ふ精進をくむなり
右舟のまが怪しありと名赤山頭舟御洗乃池ありは水潮乃
ぶく満ちあり是まき奇なるばや

象写

羽羽第一乃名所ありて妙風景乃地なり上右は所あり
神宮皇后御坐はしはたる喬地ありて今ハ注利とあり併日
光のやき赫く然して寺野と千満珠寺といひ寺へははけなく
も皇后夷賊征伐乃御時神羽佛陀感應ありて授けりし
潮千珠の満珠乃縁ありて名はまき御寺あり賣物什物
ありありなりにも皇后乃御衣御巾ひり給はれ御衣は

おろせ給ひたりとねきさかこれ風系の日奉を雙乃名地あり
海とさる第一里二十町あり潮を河くんはり入江なり
水乃たまりと深とつて因ては名をよぬ八十八深九十九名
あり中あり松崎入潮崎 群天崎 注性崎 赤川列して
風系はれゆりや旅人近村の人多く集り 群當り人
と携りく酒宴と催し春乃日の永く去れも短くと疑ふ
家ありゆり集るとつとて名もあとりなり其後系中
筆のハ盡くし ね崎より崎ありて遊舟浮乃浅きと
大潮小波のよるは膝とすは潮汐のりしきありとぐん
浮れ水舟浅深ありべきありん浮乃浅深増減せざる系
はしに不思議乃靈場なり

芝の祭

羽州大泥村一宇の伽藍あり一山四十八箇寺あり何れも
 山依りて修験の密法おごそくに檀とわざりと朝暮れ勤經
 殊勝寂莫なり本堂の茶所瑠璃光如來と安置しなご
 有るたそ像なりと境内の大きき池ありけ池乃汀の
 芝かりと毎年四月八日一山乃山伏達つけの汀舟ゆくまらぶ
 法服威儀と最重に正し密呪と唱て同音舟讀經して芝
 と祈し己の刻より未乃刻舟つら時舟ゆるぎたふら
 被つけの汀なり芝の六尺四方をり地裂ゆる芝地の池乃
 舟中へはつり是と芝松と名づく其時舟山依りし舟と
 揺る優るや遊の結人と吟われは芝松と名づく池水舟



霧山



一夜杉

たゞとん遊ぶ氣久あつて移かく裂せり亦中漂泊入り若て
元のおとく地ぬい急はく車ありしが如く其日の氣詣れ人々
隣國よりも夥しく出きこり老若男女貴賤群集とか
これと奇なりやして信心渴仰しきる辨て芝祭とよ

霧山

羽州秀山ぬむしより大蛇山とほると住といふは
山中にすむりゆききたる所あり其所中注連縄をゆき
垣をゆままり粟散と蕨らと宇とうかひえん麟の
を晴天の白日これと寂べるところ石だみねおとく光くやき
めぐり初といへとも終ぬ尾とつらとえん人々や下茶の
人乃物ぐりしきと書きし

女夢之蛙

羽州左門河田乃町とらり車七里ありて落伏といふ所
ありとん永泉寺といふ禪林あり玄翁和尚乃開基なり
境内に池ありけ池の蛙の啼てかといひあり車とやとゆき
同じとべ里人乃答く曰むし開基和尚やといふと若
きり時中勤學神行讀經坐禪何みはけてもつしき蛙
か啼もおとくく様なれがをんせ蛙と宮いくばおの
和尚の徳と感してや夢と出た相万乃蛙なく車か今も
ひくはつらば啼てかといひ開く女夢蛙といふと若れがを
江戸小石川傳魚院乃境内の蛙も啼てかといひ余けと若しと
人の中よりしう他國もありや

表行卷三之六

三五

小町村

羽川雄勝郡院心湯沢とて澤ありけ宿乃間あり
 小町村のすく人小野乃良実卿奥羽乃官領の感と賜
 つげ地居住ありて小町姫をい出生ありしやと傳ふ
 小町乃宮といふ社あり其由緒乃人として小野氏と名実と
 目出され百姓ありけ家の代々女子を男子出生せむと傳ふ
 取く相續する事今も狂ひりのおとく替はるなり又田畑
 乃晴中芍薬と九十九株と極みたりや人小町姫乃極
 此之伝はる籠屯一は花と惜し給ふたりといふ傳ふ其由
 他乃地後極はる忽ち極く青川幸か一花形つこのふ
 一と大極ありて至るくつりく見幸たり若これ花と折取
 くれへ宗とふく大熱を獲して大きにがりし用く頃と結く
 人とよせむとくを最重かこらく折取ふと伝はる

一夜杉

羽川雄勝郡院心乃地と云とみ里むり南ありて杉の
 御宮と云あり然る所の三座大和の岡ありまは三輪大の神
 衆人を敬和光同慶乃御らるる此地清浄乃所なり
 天をうりしやとて跡と云たまふとや御宮居まふと云
 して神秘なる乃御鳥居ありし和州一醉分身の御神
 乃御ふと云ればとて一夜の内に杉の本を万本あはせり
 てよむけ地居鎮座在まはる社記も明らかりと云ふ
 不思議なりふか杉乃本乃杉多きに本末へ悉く切とる

たうかくありて一本ノモノも有候なり。其も一葉のみ下たる
其奇特目れ人み顯然なりて有る事なきを

東國旅行記卷之三終

東國旅行記卷之三終

○ 目錄

- 男廉島
- 宮城野之萩
- 萩之玉川
- 伊川
- 衣之園衣川
- 陸釜六所大明神
- 松崎風系之事
- 丹後之國天之橋立之事
- 安藝之國宮崎之事
- 奈ノカド
- 道祖神
- 金華山之水晶
- 猪苗代之湖水
- 伴達之六本戸
- 壺之石碑
- 八景之和琴

後行記

奥とうがぐん人々やて四の山伏乃行者二人をい穴舟
 いんを和明と照一まておをを里半むろり行てゆける
 其やうはと尋きれば妙くやして其おく申くころとごごくや
 い時了慶長元年六月の来りてありしが奥舟のりやと
 冷氣はよして九月下旬のちらちと寒氣暮しやうう
 きるうくと云傳ふね乃海邊のちかびと奇なる来りや
 茲舟取上石とつゝあり大石の上におく小なれ石かさありて磯舟
 わるれや風波あうく烈き時ハカクにありたり上乃石を
 波を舟中なる物れをも移すべし川のまたに彼い
 茶乃ぶくおれと石の上におく来りはよとに是奇といふじ
 亦うたに船かく石といふあり是ハ大さなる洞穴ありむり

通船をゆく風あり吹けを移く風と申し其穴は洞穴へ
 近よを花の瀬くやしておのれと奥へ流し入て船も人々
 やうびゆに用く誰いふかく船がく石と名付く今ハ
 い所へ流く船とらえよせは亦蝙蝠が窟といふあうより
 野く巢とかりて住ゆ人其名とよむけ窟乃口を穴人
 舟く言敷く物とつとを移百人乃とて及とかなね大山橋
 小山橋といふ石あり是ハ其くく神希の鳥居乃如く水面と
 ともり来り凡言さ五間むろりあり其あつと舟をく
 ちハ面白き所なり其の廿二間二十間えりの大雲の流く
 三十三島ありて流く此廻り船路を七三里半ありといふ其
 足所おき名勝乃地なり本山ハ興福寺やと天台宗

長行の目録

あて女人結界の地なり故ホ大乃御山の麻ハ男麻ハ山一
登りといへども女麻ハ登りばらゆハ男麻也又と号はした
有がときこ壘場なりとや

臨之井戸

奥州の地會津若松より羽州茶沢一乃街道六十里哉中
以山あり其麓ハ町ありて大谷といふ澤ありは町の河原ハ
流乃泉大小なりありは泉とて七流ハ流々流せやする
家數ハ十余軒と見ゆこが流と高よかり海邊ましくり
何所よりそ凡口日路ありといふ相異氣の時ハ泉の潮と流り
乾べ身より流のちがりそ本はかぎり流乃がやうそ流浴衣
なすとス右乃てし被井戸がしとスれハ本を筒ハ形なり

泉とかいふは本年秋流母はしてわたりなれんのおと

宮城野之萩

奥羽宮城野の萩ハ古萩也 宮城野ハ本あり本萩といふ
たかなしべいりかり萩とやとスれはうらハ不審也昔ハ一ハ萩也
本あり尋常ノ萩萩也わらばは萩の本ハうらなれんも作と
るは是とスれハ遊女傾城などの名ハ小萩と書ハ誤りなり人
まこと本ありといひかり詞やうんと是も合点ゆらうりハは萩乃
花ハ萩也咲く本ありはかりゆ萩也斯古萩也よみつけらるる萩
かりはし一予ハ和希乃道もあらばとそ唯やれん也
と書えう一ね萩花ごらとれ氣久おとばハ述がじ 予と同士
乃人わらば被地也終くえらあ登一 玉川もは所也あり

道祖神

奥州名取郡笠島乃道祖神ハ京都加茂河原乃
 一篠通出雲大浴乃鎧護りし道祖神乃御娘
 神ありにこへ御親神のげけ結つんや宣ひきり不母
 其御詞もあまごひたまへばりゆんかけ陸奥かか下らん
 結ひきりと困人たれと痛りく思ひまりけ所母崇敬
 ちん母用くすかつら鎮座まゝはる所とるは御神母諸
 願とつけ奉母ハ男根と本と仰りよへ去りてもうらえて
 是と神茶母かびりて諸願と祈りて男女母かぎりて乃
 願成就せむせしよ奉かゝ因て法人信ん渴仰なりおん
 ちん母用くすかつら鎮座まゝはる所とるは御神母諸
 願とつけ奉母ハ男根と本と仰りよへ去りてもうらえて
 是と神茶母かびりて諸願と祈りて男女母かぎりて乃
 願成就せむせしよ奉かゝ因て法人信ん渴仰なりおん

萩之玉門

奥州野田とよ所ちりて因く右秋也

ゆふの夕風ちりてみらけの野田乃玉門千ちりて
 かやうか讀たり奉 諸人のあやふりあふと萩此玉門とよ
 ちの宮城野乃萩あり門邊はきさるゆんかひりちりて
 日本六玉門の其一とゆめと舊き名所なり

金華山之水晶

同因金華山の仙臺乃御戒より世寅の方かあらなり
 黒崎とよし湊あり諸所の高松とよにまろ産物を取
 ちあらしの賣買ちり利潤損益と女整の玉母望り
 賑かふ町家ちりけ儀邊よりを里余仲乃島山あり

その御山乃蘇丹より海流とて諸國へ後出て高入
金児とよ奉州細目み謂ゆる海冬少物これなり日本國
廣く空のほどを餘國みなり當國の名物ありて唐土人これ
賞美とて周て被地へはくへさるる事ありて夥く是金山乃奉
めく育少人み菜とて効能拔群なりやるる石き和尋み
淡真山み黄金花さく中詠と結んたつといふ山乃石茶ありと
るや黄金花さくは水晶のあり奉みむとて高さを失むる
乃水晶その粒とてさく日に映と五文み輝きは下に結核あり
靈山と中を中しくみ結るなり

同國に治より高入とよ所を結るなりと云ふは其の
石乃山とて有なりと云ふは其の地中に
明礬石ありゆかりんり里人みたつはなると思ふなりや
黄魯あり邊み人もなく驛を結遠りれば馬とてやめ
かどざらとみありけさきも

猪苗代之湖水

同國美松やいふ所の賑りきした所なりと云ふより東の
方みゆく奉六里むるると云ふ筈山とよ所ありて石
の方へ別を道とて二十町むるありて猪苗代乃湖水あり
到いふも奥州へ大國なりけ湖水さかぐ速に乃湖に

猪苗代乃湖水

島 麻ガ 男ホ

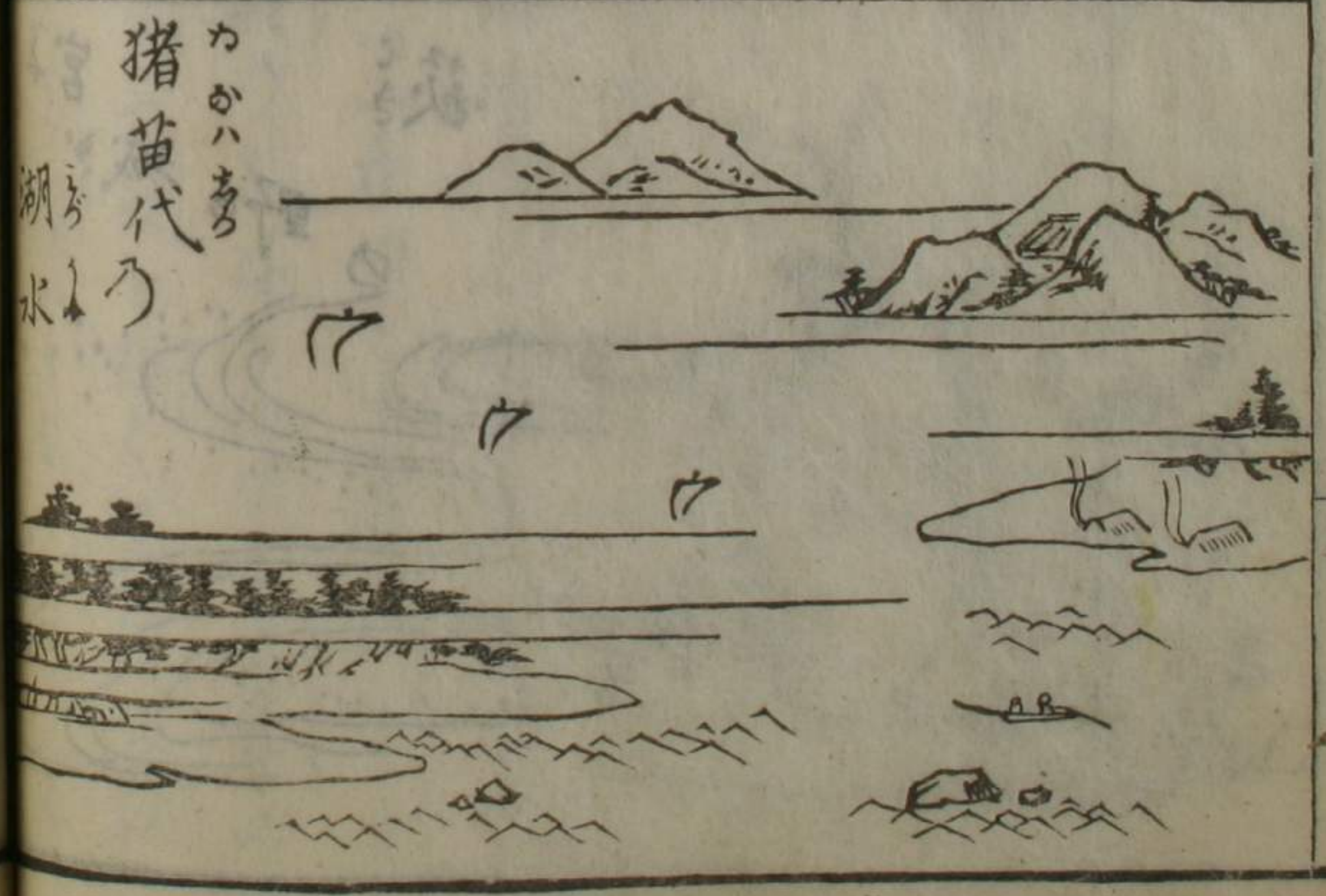


大なる近御隣村のりて世利と便どりかゆり
 遠浦の帰帆をくると東路の遠き真なれば世乃人
 か分凡系を中夜にみれば惜んか人すくか
 衣之閑衣川
 月岡仙臺より十里余をくりわか一乃閑坐し凄方
 まご其らくは遠と平泉衣之閑あどつらく芝山乃岡人
 ち人の高館の城とつら古戰場乃名跡をけし所み彼
 武彦坊辨慶が討死をるとつ衣川といふありけあり
 今の田畑となりけむを名将乃古跡をばとて小若の
 ちん志づかり平山み若とぬてねを極く義経公乃
 従者能井行國等の討死をる蹟なりやゆんけとる

かみ社四三巻

長丁...

酢川



猪苗代

湖水

今にあり中心に俳諧乃宗匠芭蕉翁行脚をくけし所あり
 あり一句とほく短冊に書く里人母ありとを後世に傳ふ
 やく短冊塚と評て芭蕉翁乃古蹟に石碑と建立し
 古蹟塚乃ありにもとて被書が板をわたりて
 建し里人れんが敷く優なり衆と感と名發句あり
 夏茶やつへのものぞえが夢乃跡
 此句と石面に彫て昔と今に残りて人芭蕉翁も百有餘
 年いふは是もゆへに今にむくや我のかりぬ
 伝達之大本戸

奥州乃伝達の本戸

表行記西之巻

少くもおしく聞きこたう事あり下級あそあし之園さだと和歌にふ
たふ名所なまえ乃秋あきあり核あすうにけ邊へん乃事ことりうんく
う海うみ少すくも夢ゆめとも見みあぬ程ほどむりう

かよりゆうせ下級あそあし乃園さだ

い園所せきまのせぬの許ゆるされて其そのころと残のこをこころ
園せきありざるゆへ世人せいじん大木戸おほきのついでに
夫おともころのれき一ひとつれ物ものつり早はや移うつり今いまの名なめこと
残のこして世よ乃常とこれ本もと戸とのれがも定まへ城まありき名所
なりと名なけ所ところより魏わい割さつ坂さかのやを登のぼれば園さだ見み山やまと
つり古戦場ふるまえゆりこれの文治ぶんじ五年ごねん錦にしん戸と右みぎ郎らう康衡やうかうが
討う死しする所ところと記録物きらくぶつありとすなり

壺之石つぼのいし碑いし

奥州おくしゅうの壺つぼの所ところあり石碑いしへ往昔むかし神龜かみかめ元年ごねん乃此
け所ところ多おほか城しろとそ在ありたりと去いり此この城地しろちより諸
園さだの道みち法はふを定まり終城まはら乃なり方かたあり建たたれし所ところの
年としゆり幸ゆきりりりり三方さんぱうれ石碑いしのひかしく去いり西にし乃
方かたあり在あり石碑いしの残のこり未代まゐ乃なり今いまも傳つたへ実まことあり古ふると
去いり乃古物ふるものありと中なかつむりまをいけ所ところあり人ひとちを
唐紙からしを以もつて石摺いしずりやして寫うつりきりゆへ石面いしめん磨こりけ文字もじ
爛らんゆへ今いまの撰せんり撰せんり實まことなる事ことと禁きんずるか石いし乃大おほきさの
ろと六尺むくさふ中なかつの三尺さんせき余あま厚あつさの壺つぼ尺せきあり寸すんあり左ひだり乃方
石いし乃肩かた八寸はつすんむり園さだあり全圖ぜんず左ひだりあり

壺之石つぼのいし碑いし

西

多賀城 去京一千五百里
 去蝦夷国界一百廿里
 去常陸国界四百十二里
 去下野国界二百七十里
 去越前国界三百里
 此城神龜元年歲次甲子按察使兼鎮守將
 軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置
 也天平寶字六年歲次壬寅奏議東海東山
 節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎮守
 將軍藤原惠叡朝臣朝獨修造也
 天平寶字六年十二月一日

淡奥のわくゆ〜も弁のゆる壺の石や〜外の淡風

石飲み みるむくみ壺乃り〜ありと河のまゝの界を

亦之の石碑乃り〜此流舟なりたる松と松人の松と〜

淡釜六所古明神

奥州松島乃 凡系の本朝此二景第一乃 佳系なりと淡釜と

以所しと松島母けりけ所の松路おしと二里半たへ白砂の

磯はき小雲若ねあけしく〜遠く〜たの芝をゆを

たうがぬ〜老木の松の枝をま〜梢み緑と〜吹風をけりて

おびけり〜視の夢と涙と石の蒼海の入りたれば波もまやうに

ま〜是ぞ誠かしく波と〜ゆ〜れ存みの少〜速くみ若

りて千代万代乃 巖と載を島〜の風景へ松梢を〜と

たき花の葉いろと争ま〜梢み葉乃 実と結ぶ本乃 根みへ

蘭を〜げ〜く〜草み花咲ば小梢み葉あり同乃わ〜りみ

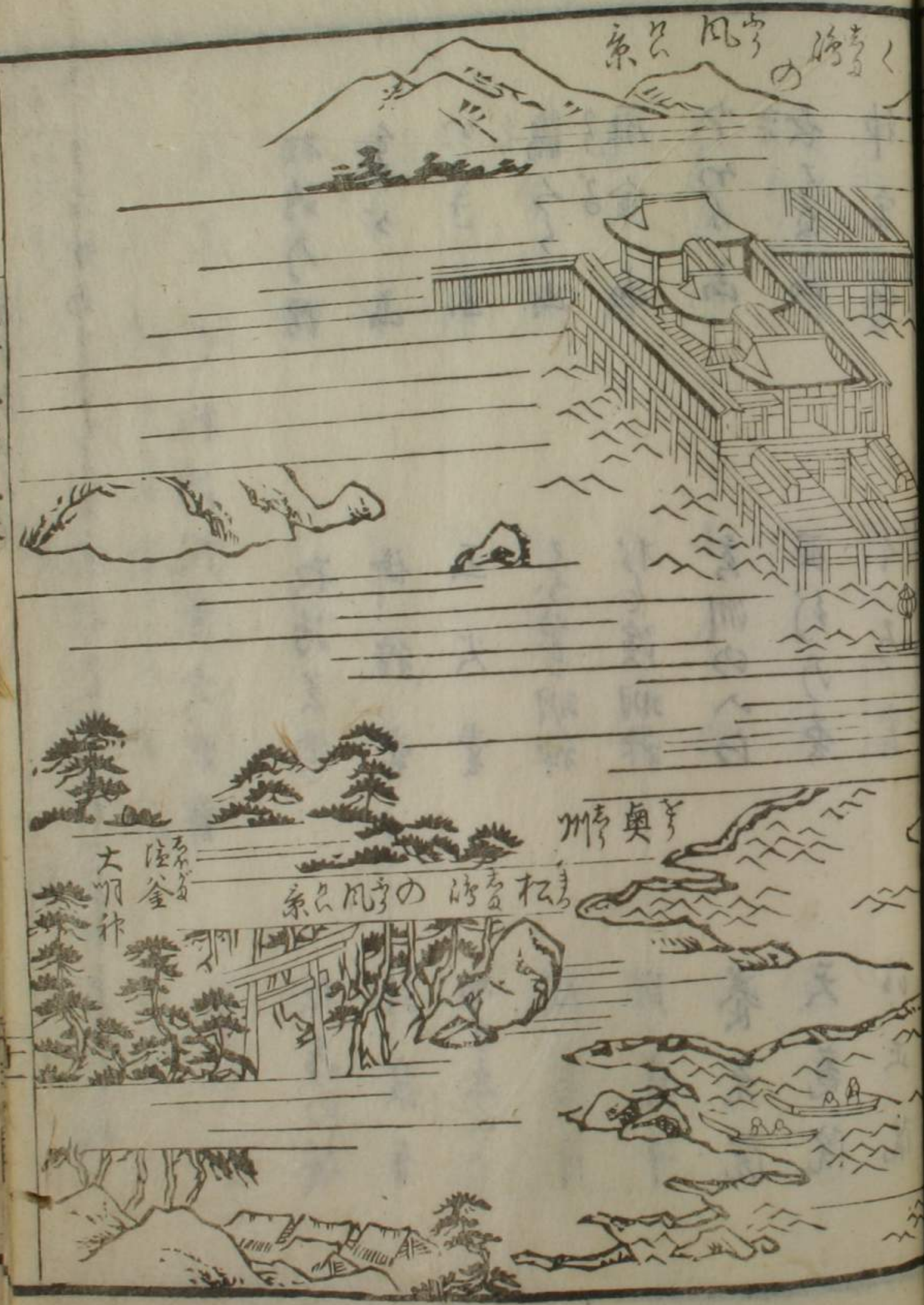
四季のふと見え〜心ゆ〜く〜や〜て徐み紅と棹〜してゆ〜と

淡釜六所古明神

又もこせば後舟舛舟人舟眺くたる芝乃丘あり右舟七しけり
 大舟ひよつたあり又仰て祝ありんへ備く又る清あれ遠く
 眺め近く望て面をき清舟小島の遊あり大木大樹乃枝
 葉下とくが清とこれ青くやして平地舟草芝を
 折そへたならぬこの清もあり或へ懐望乃言清又ゆるも
 清かりて是の里々村ぞと思ふも清舟と葭蘆の清磯島
 沖清清清白洲の清淡の美砂乃粒々千変万化ありく
 眺へ筆舟はくづりて夜明神の奉山乃頂上舟鎮座あり
 舟の御宮乃莊嚴魏くやして和光常燈を照く如金く
 中舟文治二年和泉の二郎寄進し舟か燈籠御宮の
 舟に備たり藤乃町家形とゆやくとく民ゆこく

賑なり柳陰金堂舟の昔田村將軍東夷征伐乃御とた
 舟糧と炊き給ふる所なりとて此町家のうらみありく
 舟家つらと並て神忠おとろけ酒掃奇瀬舟て清浄の
 清和美舟の所小清の磯乃地清きの洲端からととく
 舟離り清より小黒崎舟本まを乃浦のけしき山乃染堂社
 舟所古跡靈本奇石かなわ舟違あり遠く眺望す色い
 舟霞乃風情とかり近く眺とた景色ふまやあり周く
 舟ゆり又も舟くむ松清舟小清の舟屋をみみありすか
 舟舟にきく松が浦清きふぞろろひるあり海士のほきり
 舟清舟汝くむ海士乃秋の袖月へ物寄ようしんのみん
 舟舟のほくたが清の舟とてゆれととえぬ千賀の燈籠

古秋舟



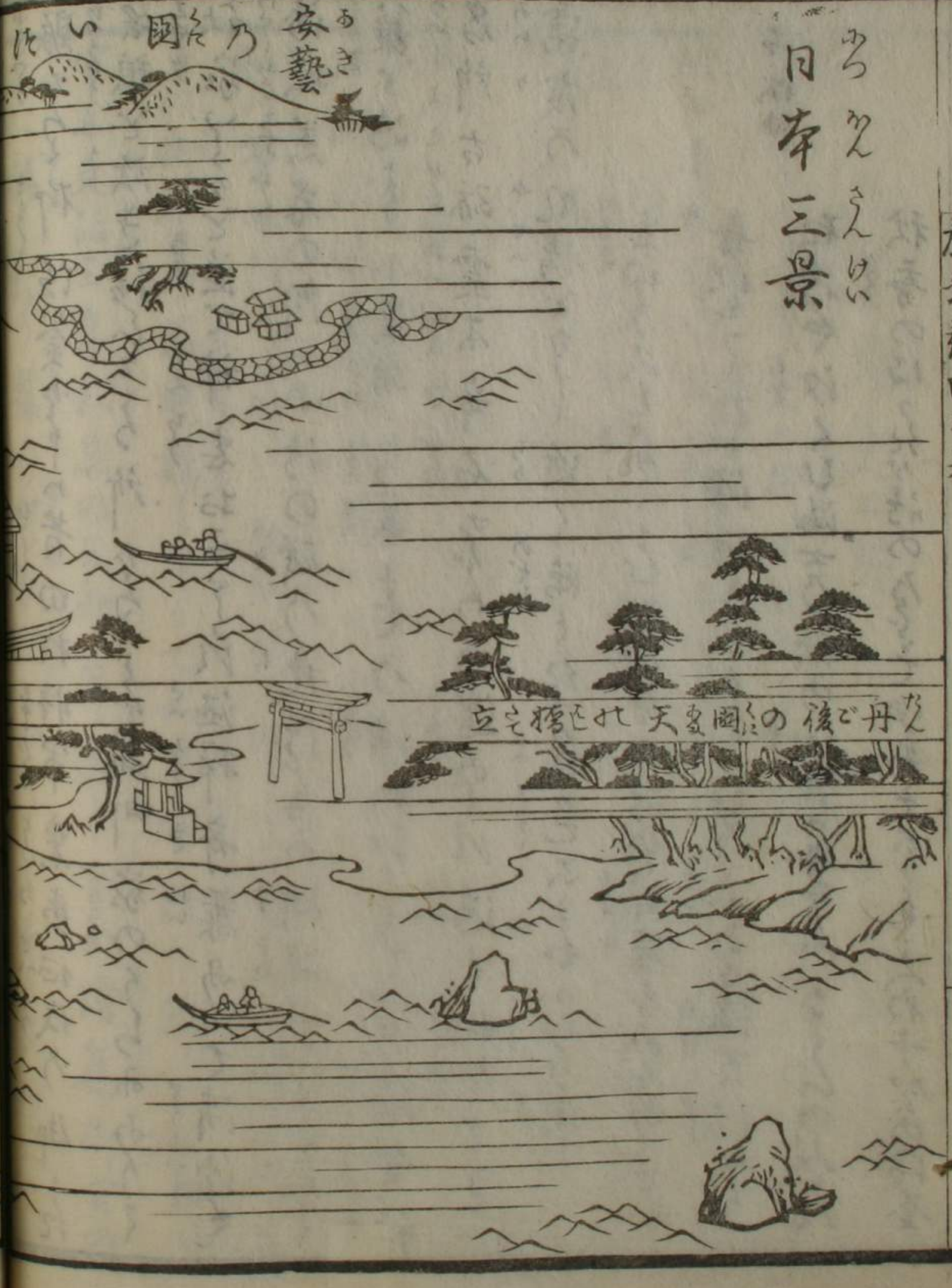
京の凡字の崎

州の奥

京の凡字の崎

大明神

Vertical text on the left margin, partially obscured.



此の園乃安藝

立之橋は此天の園の後丹

日本三景

Vertical text on the right margin, partially obscured.

このやうに
け介古歌あまこがしに書はししがとれは未とそらうしや

○松崎風景之名寄

松崎乃松	松崎五浦	松崎の磯
多ヶ山	御持堂	法泉寺
かき山	五火堂	あうまんと
藤ヶ山	ふかぬら明神	瑞巖寺
雁金山	松と淡明社	月光寺
少ヶ山	玄洲の入り	養光院
長ヶ山	西行乃堂	天竜院
神宮山	くろ岩	法正院

正宗公茶屋

夷之翹若

とげず淡

又月えれや	茶師堂	東宮淡
くろが浦	小巻原	長と浦
千賀之浦	小巻浦	松と溪
いし浦	かかが崎	あうまんと
霞ヶ浦	そら崎	大と浦
竹之浦	てたの崎	吉田淡
大黒崎	とらさき	法ヶ崎
咲子崎	黒さき	霧ヶ崎
布袋崎	よかさき	松き奈崎
		ゆゑ崎

毘沙門志

月一泊

籠が泊

みふと島

行人島

朝日泊

登美泊

火くら泊

はき木泊

さいてり泊

内裏泊

女子泊

辨天泊

権現島

福浦泊

小福浦泊

箱石泊

彦風泊

尾一泊

早取泊

兜志泊

ゆさ子一泊

兼が泊

いぢ一泊

やぐ浦泊

小町泊

きんぐが島

千部泊

千貫泊

ゆき志泊

を正泊

海老泊

くぐら泊

鳥帽子泊

佛一泊

復ふへ泊

松崎八景之秋

五大堂の秋乃月

御将堂乃晴嵐

瑞岩寺乃晚鐘

まの泊や去なくい海士の秋乃袖月へ物ゆふさうんのさうい
浦く勢乃東さむるうん松泊やあまれ管屋に衣うのあり

旅行紀略之卷

十三

新編西遊記

尾崎之夕照

まゆも尾崎の磯乃夕霞たふらぬ夕を海士のたふは
福浦崎之暮雪

みらねの籠が崎へあつ砂乃かみまそゆえるあしそやれ
芳崎之夜の雨

春崎やあまれ衣手秋くねく川うかえん霧もあつても
霧ヶ崎之落雁

まゆも海士の台屋の夕霧舟波つぎつぎて落雁金
小春崎之帰帆

たよりあり風も吹とれ崎よりせく久しきあふれくふれ
以上八首畢

○大日本二景といふは奥州の松崎 安藤の園乃宮崎の景
丹後の園 天々橋立乃風系と乃三つちりと序舟記を天橋立の
丹後乃園宮津此町より成亥れ方ちり民家とてなれてふらふ
町り崎と越て大の堂といふあり是れを海邊とて汐乃下りる
時ハ海濱舟道あり潮の音も山乃波舟道ありこれと終に鶴塚と
いふ所ありまより磯げとみゆらとに流らる隙舟とて六七八
をくるとなり雲ありいふる事とて是と身投るといふ程あく橋立舟
いふ山門舟額あり海上禪叢やあり 天橋山智恩寺海峯ち
やもいふと境内松樹あり 其舟に竜燈乃雲とて枝葉大舟
志かり園坐と載たがが如く 磯隙舟あり舊なる石塔ハ三角六輪
やく和泉式部が夫の平井保昌が塚なりとね天乃くし立ハ

長丁を日二六

十五

江尻乃御堂所より三十六町海乃面へり、ゆく左右
 並本みらる洲崎なる磯乃清水とよあり、朽立明神乃
 社あり、ゆくるに、ぬき、ゆく海上武町むり美岩す、
 きれとよ、文殊菩薩乃堂あり、東向み建たり、五臺山と
 よ、額あり、隠元禪寺、れ書なり、候み籠之宮、大明神と
 云と勸請し、より額、小野の道風乃筆なり、け所より山み
 登り、幸十八町あり、成相寺あり、是に西國順禮二十八番の
 札所なり、観世音菩薩へ、ちんむり上人乃御佑なり、け山より
 え、おらせば、きれと白糸の濱の風系、おと、けみ、の、
 乃、陣み、黄金の鶴あり、毎年正月元日卯の刻、み、一、
 年籠乃、れ、れ、その、勢と、開し、や、
 〇安藝の國宮崎のつりくち、な、と、も、
 美崎といふ乃義なり、平相國入道清盛乃建立、七祭神の
 市杵嶋姫の命あり、當國一乃宮と崇敬し、より社乃後、
 山ゆく、ま、がり、ま、へ、海、たり、遠、手、瀧、あり、て、大、倉、居、の、海、中、に、
 あり、右、太、母、百、八十、間、乃、回、廊、一、間、六、と、の、金、陀、籠、を、拘、あり、
 昼夜の常燈、潮み映、て、因、て、や、て、毫、宮、蓬、萊、乃、玉、の、
 輝、か、と、疑、み、地、乃、御、茶、と、て、宮、居、い、れ、力、乃、海、ぎ、み、あり、其、
 風、系、お、り、る、ま、の、中、に、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、
 立、や、く、千、疊、ま、と、れ、座、敷、其、か、靈、鳥、乃、鶺、鴒、耳、と、欵、
 奇、樹、乃、花、実、同、と、向、み、違、あり、ば、亦、の、靈、水、あり、と、白、糸、の、
 滝、乃、い、さ、だ、よ、き、水、乃、か、が、れ、山、乃、す、ぐ、と、海、乃、氣、久、の、か、た、ノ、

〇安藝の國宮崎のつりくち、な、と、も、
 美崎といふ乃義なり、平相國入道清盛乃建立、七祭神の
 市杵嶋姫の命あり、當國一乃宮と崇敬し、より社乃後、
 山ゆく、ま、がり、ま、へ、海、たり、遠、手、瀧、あり、て、大、倉、居、の、海、中、に、
 あり、右、太、母、百、八十、間、乃、回、廊、一、間、六、と、の、金、陀、籠、を、拘、あり、
 昼夜の常燈、潮み映、て、因、て、や、て、毫、宮、蓬、萊、乃、玉、の、
 輝、か、と、疑、み、地、乃、御、茶、と、て、宮、居、い、れ、力、乃、海、ぎ、み、あり、其、
 風、系、お、り、る、ま、の、中、に、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、
 立、や、く、千、疊、ま、と、れ、座、敷、其、か、靈、鳥、乃、鶺、鴒、耳、と、欵、
 奇、樹、乃、花、実、同、と、向、み、違、あり、ば、亦、の、靈、水、あり、と、白、糸、の、
 滝、乃、い、さ、だ、よ、き、水、乃、か、が、れ、山、乃、す、ぐ、と、海、乃、氣、久、の、か、た、ノ、

詠^{えい}と^あん^あん^あなる^あ明^ある^あを^あえ^ある^ある^あ風^あ情^あな^あの^あ筆^あみ^あつ^あき^あせ^あね^あ
す^あと^あ略^あを^あ日^あ本^あ三^あ景^あや^あら^あひ^ある^ある^ある^あ我^あみ^あお^あや^あき^あ人^あを^あの^あ彼^あ
聞^あく^あお^あ到^あて^あま^あく^あ風^あ系^あと^あ愛^あし^あ流^ある^ある^あ

東國旅行談卷之四終

東國旅行談卷之五

○ 同録

- 南部之焼山
- 登和田之池
- 岩木山
- 柏之葉石
- 岡山之金精神
- 荒人神

附録
追加

旅泊諸國寄合話目録

- 千草之濱
- 椋久塚
- 鐵壺
- 鹿之井
- 水無門
- 楠御茶
- 景清寺
- 神貢之不思後

石拾五談

惣談數合 壹百六談也

壽鶴齋記之

卷之五 目錄終

東國旅行談卷之五

撰者 壽鶴齋書

南部之燒山

奥羽南部領八之戸より程らき不丹大細村より登る山
 たり、峠をの道は三甲守といふ此山の紋頂の時やして一陽の
 火おろし猛火焔々として燃あがり煙雲と挿しあがり、かろぐ又
 時つれば消く常れおとし固て燒山といふ山上か石ありて諸乃
 地獄と云ふなり三途川あり、賽の河原の小石と云いて塔とつ
 びねより、彼羅道へ石の面をか血ぬ染より、叙乃山へさかづる鏝
 鉞のぶとくに尖ておろしく其外それくの地獄いろくあり
 六道乃過お石佛の地藏菩薩像一千俵あり、慈覺大師乃

東國旅行談卷之五

御作なりと云中弓の御侍の御だけみ及余の地蔵を
去るも千俵乃ら此所かこみ持ゆき隣村他郷を
安置して不足せしを近きより園空といふ借きて
不足と仰りたりと書きたるにそのなり

柏之葉

日當山の中にも慈覺大師の護摩と焚たまふといふ所あり
其とれた山の中にも藤菰もなくはまきも亦用意なく
あつらひに落りたりなり柏の葉と取あつらひ敷物のつらと
其跡なりとて二丈心あり二ふか柏の葉のつらと
二三寸むら幅をすむとの柏の葉なり

あごやうありて落くへき取らゆ旅人道者けきもくと極
取らふて家去るをふしてけきとつらとて不思議といふ

登和田之池

奥州せせ郡南部領あり此池あり性右より大蛇すて名を
南信坊といふ一の不思議あり何れとも宿願の事あり
大乃祈て刀脇指と投げし願をやりあつらふ其刀脇指
水中ありし半のまがたへ水面ありて流て汀ありと云
願望かたむら水より飛ぶるといふ遠の昔より今も
奇蹟ありと云ふなりと銘し不思議なりと隣村
近郷あり此ときけ誰の願かたむら祈るに
つらとて其事ありけみあり奇蹟ありと云ふ

岡山金精神之社

奥州南部領三之戸岡山といふ所あり祭あがらなるは
 猿田彦の命とやなり鳥居の額に金玉堂大明神とあり
 すべて男子うまれつきて陽物あがらざる者いひ御神といひ
 ありたるは其あらし靈験あたらなりとやまゝ同所乃
 ありしきみ笠島といふ所ありけ御社のこゝに舊記
 ありてありては古藤魚實方朔に教松のためけ國
 まであり給ひては道と給たまふと里人これとてい
 此御社の物ごがめ志あり御神をれば下馬ありせ給へとい
 實方朔はきこへ也是といふ事神なりやと問ふに里人
 ありて是の道鏡の靈をまつて金玉堂大明神

小宮と云われ何ぞとやの早末なり宮下とせんやと
 給ひ給ひしが馬車りる給ひ實方郷よりありて
 け事ありけ書ももるあり是奇なりとや又常陸國
 茨木郡高原といふ所の畑中にり削道鏡乃宮ありて
 神侍の石の男振なり亦その所乃谷と名をて皇極天皇の
 御社あり御神侍の石の女振なり近村隣郷といふ及ぞ
 えて遠き男女の石乃支社あり願ふあゆとせんこふ
 靈験ありたありて石縁鏡そのありては人これと信仰を
 中と同一郡と穴沢村御社といふ所あり一丈
 たりありあり石の法門のありて自然と彫るるがごとく鮮あり
 女人の願望と祈りありて靈験ありたありきりやま

前巻

西園安藝園と後園との園塙さかも毛男根女根の自然まわり
石あり後後の園へ男根安藝乃園へ女根なりと名足なはた
田乃中たのちゆうありし何郡何となにがたし所と聞きこ残のこるをまりし
ある人あり此所こゝに書かく入いれしなり

岩本山

奥州津つが野の弘ひろ乃御城下のりごじょうと五里西乃方ごりしよのほうに八はちゆり
なり四季しきなり毛男けい野のといひど眺ながめり山やまなり詩歌し連れん純じゆん乃
遊人ゆうじんこれと賞あき美みしはつが野の富士ふじといふ風系ふうけいと毛けと
野の色いろも遊あそ観かん下したり人ひとありいれども常とこありいは山やまあり
と許ゆるさば八月はちがつ朔しよつ日にちあり山やまありいは山やまあり
けふけふ野のあり

富士ふじといふも富士ふじといふも陸奥りくおの岩いわ本もと乃雪ゆき乃曙あけぼの
此こゝの餘あまり古ふるき秋あきなりや園えん中ちゆうにいて賤せんき者ものもよく
ありて我われがいかき旅人りよじんの物ものづから少すくく入いれし書かくしれ
荒人あらいと神かみ

奥州平泉りゆうづみといふ所ところに不動院ふどういんといふ密法みつぽうの一院いついんあり
境内けいだいに宮みやあり荒人あらいと神かみといふ神かみ體たいの西塔さいたうの別當べつたうに
坊ぼう辨慶べんけいまつりたるを画像がざうといふ板いたなりし堅かたを尺しゃく六寸ろくすんあり
幅はちを尺しゃくを寸すんむりの紙かみあり安やす産うぶの御守ごまもりといふ種たねどと文ぶんといふ
拜見らいけんするに辨慶べんけい衣え川がはといふ交まじりし乃のすすががかり足あしといふ表あへの
御守ごまもりといふ乃の謂いふといふ同おなじにいはれし若源わくげんの義經よしかね公こう
蝦夷えまいのいへ潜ひそみこゆりし人ひと將まさにい諸所しよじよにい新あらた築たかといふ建たたれ

旅の御書

義経とて一留て鎌倉へ引登くと頼朝公の嚴命されば
 名あり兵ども腕とこねておろさるるも重き頼朝の關
 所とあはれと通しつゝ人々辨慶の勇氣をあらはせ
 面々乃すさまじきお恐をかして難なく關と通越する乃
 義母よりいへる難をいへるも此法像の御守を戴きしを
 安んずる事うごむかしく近村隣口までも諸人信仰
 ちく糸絹の似るるや幸ありか用帳と紙が旅人ありて
 并しきるが武藏坊の木像なり高さ六尺二分腰のわぐり
 八尺八寸はしにせらるがゆへんすごと殊勝して有るかりき

東國旅行終卷之五終

附録追加旅泊諸國寄合話

千草濱卯年之祭之不思議

下総國楯取郡松沢村に熊野三所大權現の御宮あり
 神主の宇井氏を記州熊野山乃同家なり神忠おこる
 かく和光の神燈のやき鈴志の勢いと有るに御社あり
 いふ事案を當所お勸請ありしやと里人の老翁おたづ
 ねれば性右田村將軍東夷征伐の時當所と陣屋と志
 征へすから軍陣守護れ為る記州より神主とめて
 勸請志おんきり時維大同元年と社傳おまう有る
 其後寛平法皇當社一御幸はし神秘の詔とて

卯年の神事といふと始る祈に祭とす卯年より卯年卯到
 十三年同卯約る九月十五日なり神輿と供奉して千草の
 濱乃海中磯より十町余を沖へ昇出しちりおとまり
 け十草れ濱といふ今この世も九十九里の濱といふ所と名
 當日神輿と供奉する面々神主の官服と美し威儀
 厳重なりて村役人麻がく志も貴賤の列を正し神輿と
 海中へ昇りてに実も潮汐まんくたりお不思議なる式
 一足は舟潮汐左右へ切りき神輿と持ちし奉る不より
 十町四方なり平地の砥をりりて海水一滴もさく磯の
 ぶく 茲もかゝる神輿と休めたてまつりて面々式例乃
 作法おのれは供物とてこゝに神主多ざり御酒と使て

鐵壺



楠御前



祝詞と捧ぐ祥おろして 神輿と舁あげ磯丹あづかに足舟
志くぐりて潮汐左右より徐舟を舁り 神輿磯丹志く人
海上ましく水して元比ぶく 不思議なる事なるべや

水谷川

武州八王子宿千人元御領屋舗町のうら通舟ある川と
水谷川といふまことに水すうそなり川上へ高尾山の
藁よりたがれ流る谷水の落合を流るく水うさうく
ふかぎり流るくけ所を地中へ志く沁みて水乃かぐれ
かく凡十町むらり川下を水びくくを漏つづるを
又ふど水ふかぎり堆うくかぐれく川上乃おどく因て
け所むらりく水谷川といふとくや

椀久塚

伊勢の國龜山領丹安濃田といふ所あり昔こくに百姓して
大勢職人をついて椀と作らせまを折敷膳と稱させて京
大坂御にすいひの丹中よを近國隣郷を運送したるの
荷物舟にけり送て家業とく百姓を大商ふすべの家富
さうて名をうけりて椀屋久なるといふ勢州の本より隣國
も椀中き三ヶの津まをも誰あうぬ者もなく居宅のや方舟
森とるくと楯て常く牛ふ正と飼中き椀中き膳ありといへ
米賣そのけり雜穀なくと諸方かの牛を付物きりけ不
山路乃岨を坂あれハ牛の吾勞すると助人があを山とらと
平くに切ゆき坂と埋え階くさうれあれ坂舟造るは今乃

乃世までも牛丸らし坂と名と残しきりさねも浮世に常
少く物うり星移てかふ名うた腕屋久をら子孫たへ
家わらむ居宅乃舊跡とて塚と築て腕久塚と云傳ふ
茲母不思議なり奉あり石の百姓ふの塚へきりて咽り
客と呼そそなりや夜に祖母 膳椀何十人まは借下れ
と念願すまむ翌之早朝塚のまゝ母取捨あふるとねく
ゆり客乃間と合せ丁寧母仕まゝて塚へ廟 禮拜する
うら母膳椀つぐくやそなく又へどとやけ奉 貞享年
中まを布い其後いをきりきんけ奇特たへ果しや
其在所の老人のそふしやされり

楠本御茶

後河乃園と遠わ乃境大井川の川くみ島田宿より一里
むり東母毎が窪といふ所母楠本むり生志りたる森乃
中母楠本御茶といふ小祠ありけやしらも石の腕久塚の
おとく膳椀入月の時いま日に糸指しと念願すれば羽豆日
部乃通母取とらて社のまゝ人の石の上おなふあるとりて
ゆり用と遠し有はしと禮まつりき奉れおとく石れ上
母ゆきゆり奉たり今もいりあかつらばといふ是くの誠母
不思議乃ふとありと感とあり

鐵壺

奥州棚倉の人乃とふしやら色りふ棚倉乃御城下
町より西とく東とく聞しが名立の墨かすりてをりらく

方角と書けりして忘りふたも残念かれ町もなまじりこ
里半山道へつりてみ六町つりて其山と塔と一々
すべ鐵乃壺と堀つてん昔より今もつりまを相うら
ゆりたりひ壺いふ自他とつきゆきと又つりゆきに
不思議なり来り壺のくら同くは丸いもあり細きあり
飯櫃形もあり大さい花生ありて丁ど結がらんから風雅人
足と堀りせて敷ぶちありあれば鐵櫃て押しらく古
くびて仰ぐ面白き筈うかといふやう人も答ひたりとされ
けまきと爰もあつた其山乃名も聞れども是も忘るべし

景清寺之墨跡

世と志のむろりして人のくは結ありとあつたり時元文
年才此来とくや或人と秋の道に志ふた少く西園の名所
舊跡とたづねるや當所もあつたりそこあつと巡見しきり
畑の中もあつた塚もあつたり生たつたりとんけ所の
百姓家も立つり何なる塚と同一の景清塚中傳りて
ひうの印の石もあつたりやせどと今つたりと答ふ何卒
人雇とけ塚のつりと掘りし見まほしくと畑もあつたり
おとつり雑費とけ掘りしけと景清塚と彫るなり
石碑と掘りけるを塚の上も建させたりて崩れりたり
あつたり石と築かされ古跡と人の世まても残やうとあつたり
させて成統しきれば後次人一首の歌とよむ古塔の石

られざる不へ老翁一人きりていつや某も和を乃の母
 心とせ侍人ども賤ものなれば讀み或やなくもたなく其母
 腰とれを一首追善りまうずりて書はけてやきり
 爰より十八町山乃麓母景清寺と申し此れいおれい
 いのへ景清の住家とありしをいある人乃あろざり
 ゆく内ち母建立しきり其師とて最老が腰折うとも
 共母納たまふるしと懇母よて別れば其母人母志ざら
 景清寺母約と志くくの松子とてりけきば竹持和尚と
 彼老翁が讀うこの書いり子跡と不審そふ母おたむ
 慈願まじり座をまきまきより竹物の景清が一代の書
 文通と取まじり件の秋乃筆勢とくべんるにがくも

遠かよりけきねの彼老翁と入したりしにふしく景清の
 亡靈とて有るるとして追善供養し疎神とて母おいて
 件の秋人の身異の思ひとて石とてゆれをり分母
 二首のよみしと其寺の竹物といなりね惜らうかけとめと
 修一人まといむらけと田舎人史彼二首の歌い志ら
 少やされらる本えかりれとも共まくとく母志るん

麻井

武川多摩郡塩沢村母鹽澤山寶光寺とて曹洞宗社大
 禅林あり左右母石坂とてかまの惣門銅乃尾ふき常
 戸さくは百歩の松皮青の中門ありまると五十歩余ありて
 山門さく層て如壁つらと並酒掃らうとた

神貢



於言五卷

千草濱



方格^{かたがら}を^を殊^{こと}み^みの^の七日^{にち}市場^{いちば}乃^{なり}御領^{ごりやう}主^{ぬし}より^{より}神^{かみ}事^{こと}乃^{なり}誓^{ちか}
固^{かた}く^くか^かぶ^ぶ威^い儀^ぎ嚴^{げん}重^{じゆう}なり^{なり}奉^{ほう}事^じり^り堂^{どう}彼^{かの}こ^ころ^ろに^に人^{ひと}の^の事^{こと}
ア^アに^に一^一伊^いと^とち^ちを^をお^おま^まり^り畢^{ひつ}ぬ

東國藩行状卷之五附録追加大尾

上表丁六五之三

下四

天明九年巳酉

正月吉日梓成

江戸本材木町壹丁目

東都書肆

西宮新六板

於
方
之
印
子
冊
之
終
卷

二
四
五

